

令和4年度 第72回高知県

芸術祭

KOCHI ART FESTIVAL

2022

県民の文化芸術活動を
支援・発信していきます。

令和4年

9.17 [土] ▶ 12.18 [日]

事業実施
報告書

第72回高知県芸術祭事業実施報告書

発行日 令和5年3月11日

発行 高知県芸術祭執行委員会
高知市高須353-2(公益財団法人高知県文化財団)
TEL 088-866-8013 FAX 088-866-8008

印刷 筒井紙業印刷株式会社
高知市石立町158 TEL 088-831-6569

令和4年度 第72回高知県芸術祭事業実施報告書

目次

令和4年度第72回高知県芸術祭を顧みて 高知県芸術祭執行委員会 委員長 新納 朋代	1
第72回高知県芸術祭 概要	2
助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2022」 申請要項・選考結果・実施報告	4
助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2022」 事業実施報告会	15
第51回高知県文芸賞 募集要項・応募状況等・入選作品一覧	32
プレイベント「土佐女子中学高等学校書道部パフォーマンス」	35
オープニングイベント「 <small>ザ・レヴ・サクソフォン・クワルテット</small> The Rev Saxophone Quartet」	36
メインイベント 第30回 中四国文化の集い「郷土芸能の集いin高知」	37
「図工と音楽会inむろと廃校水族館」	39
共催行事	40
協賛行事	44
高知県芸術祭執行委員会 委員名簿	52

令和4年度第72回高知県芸術祭を顧みて

高知県芸術祭執行委員会 委員長 新納 朋代

今年で72回目を迎えました『高知県芸術祭』は、広く県民が芸術に親しみ、高知の文化芸術の魅力を再発見、発信する期間として毎年秋に開催しております。これまで多くの方々の暖かいご支援、ご協力により無事に開催し続けてこれられましたことに、改めて厚く御礼を申し上げます。

今年度は、9月17日(土)～12月18日(日)を会期として設け、約3ヵ月にわたり、主催事業の5行事をはじめ、共催行事21、協賛行事44、助成事業「KOCHI ART PROJECTS」14の計84の行事が実施されました。依然、新型コロナウイルス感染症の影響下ではありますが、主催者の皆様方の適切な感染症対策により、今年度は多くのイベントを開催することができました。

主催事業を一部抜粋して紹介しますと、高知市帯屋町商店街でプレイベント「土佐女子中学高等学校書道部パフォーマンス」を開催し、作品を約2か月間アーケード内に展示しました。イベントの様子は各報道機関で取り上げられ、芸術祭の開幕を周知することができました。これを機に、中高生の方々にも芸術祭に興味を持ってもらえたのであれば嬉しい限りです。メインイベント「中四国文化の集い」は、本来昨年度開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響に伴い1年延期させていただいたものです。中四国各県より10団体が一堂に会し、それぞれの魅力溢れる演目を披露いただきました。団体の歴史や活動内容、各県の紹介もしていただき、地域文化の交流をより深めることができました。郷土芸能におきましては、高齢化や後継者不足等により存続が難しくなっているものが少なくない中、各団体、若い方に参加してもらえるような普及活動をしたり、国際交流もされていたりするなど保存と継承に尽力されておりました。その土地にしかない郷土芸能の魅力を人々にお届けできたこの集いが、新しい時代につなげるための一助となれば幸いです。また毎年、短編小説・詩・短歌・俳句・川柳の5つの部門におきまして、県内の多くの方々から応募をいただいております「高知県文芸賞」

の全体の応募数は昨年度並みでしたが、俳句の部門では19歳以下の応募が大幅に増加しておりました。若い方々が文芸賞に挑戦してくださることは、大変喜ばしいことと思います。今後も、引き続き県内の多くの方々に応募を呼び掛けるなど、文芸の振興に寄与してまいりたいと考えております。

本報告書では、令和4年度高知県芸術祭の成果をまとめております。県全体で文化芸術活動が活発に行われるような環境づくりにつなげていけるよう、今後ともご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

[事業数・参加人数]

◆助成事業 「KOCHI ART PROJECTS 2022」

14事業実施(※1事業中止)・7,404人

◆主催事業

プレイベント

「土佐女子中学高等学校書道部パフォーマンス」
158人

オープニングイベント

ザ・レヴ・サクソフォン・クワルテット

「The Rev Saxophone Quartet」…358人

メインイベント「第30回中四国文化の集い『郷土芸能の集いin高知』」…377人

「図工と音楽会inむろと廃校水族館」…100人

「第51回高知県文芸賞」…692人(1,824作品)

◆共催行事 21行事実施(※1行事中止)・83,346人

◆協賛行事 44行事実施・47,481人

第72回高知県芸術祭 概要

◆芸術祭とは

広く県民が芸術に親しみ、また高知の文化芸術の魅力を再発見、発信する期間

◆高知県芸術祭の方針

- ①子どもから大人まで広く県民が様々な文化芸術に親しみ、生涯にわたって文化芸術に親しむ機会を創出する
- ②地域文化の伝承と創造を支援し、地域活力を創出する
- ③県内各地域に賑わいを創出し、“活力ある高知県”を目指す

開催期間 令和4年9月17日(土)～12月18日(日)

主催 高知県・公益財団法人高知県文化財団

主管 高知県芸術祭執行委員会

後援 NHK高知放送局・高知新聞社・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・

KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知



令和4年度第72回高知県芸術祭 日程表

- 5月6日 「KOCHI ART PROJECTS 2022」募集チラシ・要項 発送(締切:6月10日)
芸術祭参加団体募集のご案内 発送(締切:8月24日※ガイドブックへの掲載を希望する場合は7月6日)
- 6月24日 第51回高知県文芸賞作品募集チラシ 発送(締切:9月30日)
- 6月28日 第1回高知県芸術祭執行委員会およびKAP審査会
(高知県立美術館・2階会議室)
〈議 題〉令和3年度文化芸術振興ビジョン推進事業等委託業務
収支決算について
〈報告事項〉芸術祭の進捗状況について
※執行委員会終了後、KAP一次審査会を開催
- 8月28日 プレイベント『土佐女子中学高等学校書道部パフォーマンス』
- 8月31日 芸術祭公式ガイドブックおよびポスター 発送
- 9月12日 第2回高知県芸術祭執行委員会
〈議 題〉助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2022」の視察について
〈報告事項〉(1)共催、協賛行事の参加状況について
(2)芸術祭広報について
(3)「芸術祭オープニングイベント」等について
(4)次年度に向けたKAPの見直しについて
(5)今後の日程について
- 9月17日 第72回高知県芸術祭開幕
- 9月18日 『高知街ラ・ラ・ラ音楽祭2022』(KAP助成事業)※中止
- 9月25日 『Kochi art warming第2回公演「真夏の夜の夢」』(KAP助成事業)
ザ・レヴ・サクソフォン・クワルテット
- 9月27日 オープニングイベント『The Rev Saxophone Quartet』
- 10月1日 『高知市魚の棚商店街アートマルシェ』(KAP助成事業)※10月31日迄
- 10月8日 『邦楽器による【しばてん物語】と音楽』(KAP助成事業)
- 10月10日 メインイベント「第30回中四国文化の集い『郷土芸能の集いin高知』」



- 10月21日 第51回高知県文芸賞審査会(高知県立美術館・2階会議室等)※10月26日迄(内、5日間)
- 10月23日 『牧野富太郎伝 草木の人』(KAP助成事業)
- 10月29日 『土佐山田・あーとリンク vol.2』(KAP助成事業)※11月6日迄
- 10月31日 『しまんと景観デザイン研究所～むこうほどこだ。～』(KAP助成事業)※11月6日迄
- 11月1日 『ファインダー越しに見る室戸ユネスコ世界ジオパーク～地域の自然と人の暮らし～』(KAP助成事業)※12月10日迄
- 11月5日 『いしはら音楽祭～紅葉彩る三宝山福寺コンサート～』(KAP助成事業)
- 11月13日 『図工と音楽会inむろと廃校水族館』
- 11月19日 『第三回いっとひょう沈下橋アートプロジェクト』(KAP助成事業)
- 11月23日 『過去から未来へ「南海トラフで芸術は死にますか?」(東日本大震災からの声)芸術の四国遍路展・高知編』(KAP助成事業)※12月4日迄
- 11月26日 『PaperAA!～赤れんが商家を使ったインスタレーションと映像ワークショップ～』(KAP助成事業)※12月4日迄
- 11月30日 『第33回高知版画協会展・徳島版画交流展』(KAP助成事業)※12月11日迄
- 12月3日 『第2回「宿毛寄席jin林邸』(KAP助成事業)
『牧野富太郎伝 草を褥に』(KAP助成事業)
- 12月10日 『晴れる夜に誰かの寝息が聞こえる One of the bear shooters in the world』(KAP助成事業)
- 12月11日 第51回高知県文芸賞表彰式(高知県立文学館・文学館ホール)
- 12月13日 『琴と三味線のお話と音楽～金林寺～』(KAP助成事業)
- 12月18日 第72回高知県芸術祭閉幕
- 令和5年
1月22日 助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2022」事業報告会(高知県立美術館・1階講義室)
- 3月28日 第3回高知県芸術祭執行委員会(高知県立美術館・2階会議室)※予定

注) KAP … KOCHI ART PROJECTS

助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2022」

令和4年度 第72回高知県芸術祭助成事業

KOCHI ART PROJECTS

高知アートプロジェクト
2022

申請要項

対象となる活動

- ◎令和4年度高知県芸術祭開催期間中に実施されるもの
開催期間:令和4年9月17日(土)～12月18日(日)
- ◎営利、宣伝、特定の政治又は宗教活動を目的としないもの
※事前の準備等に係る費用も助成の対象となります。
※個人でも団体(NPO・実行委員会等)でも申請いただけます。

対象事業者

高知県内に事務所または活動拠点を有し、文化芸術活動を行う団体、個人が対象です。(県、市町村、県からの出資を受けている法人等を除く。)

審査項目

- ◎事業内容の文化的・芸術的な質:事業内容が文化・芸術的に評価できるか。
 - ◎事業の効果:多くの県民に対して文化的影響力を持ち得、創造する文化芸術活動を促進できる内容か。
 - ◎地域への文化的貢献度:その事業を実施することで、住民の文化意識の啓発や地域貢献等に資するか。
 - ◎事業の妥当性:事業内容の構成に無理がないか、また、芸術祭の開催趣旨にそものか、関係者だけでなく、より波及する内容か。
 - ◎事業の実現可能性:事業の実現のために具体的な事業計画が立てられ、助成金が効果的に使用されるか。
- ※これに加え、オプションの審査項目として「地域との社会的な密着度」、「地域との文化・歴史的な密着度」、「事業の継続可能性」、「一般県民に対する情報発信の工夫」の4項目について加点を行います。

助成内容

助成:1事業あたり上限額30万円

- ※少額(10万円程度)での申請も可能です。
- ※審査会にて、提出された申請内容と申請額を勘案し助成額を決定いたします。
- ※過去に助成を受けたことのある団体も応募できます。

〔本助成事業は、県内の文化芸術活動に関わる団体等の裾野を広げることを主な目的としており、過去に3回以上助成を受けたことのある団体については、不採択となる可能性もございます。ご了承ください。〕

助成条件

- ◎広報物等に指定クレジットを必ず記載すること。
(記載のない場合は助成交付を取り消す場合があります。)
※指定クレジットは、芸術祭公式HPからダウンロードできます。
- ◎高知県芸術祭執行委員会事務局が作成する広報物等への原稿作成協力ができること。
- ◎明確な会計経理を実施し、収支及び事業実施の証拠書類を保管のうえ、指示があった場合にはすぐに提出できること。
※助成団体については、領収書等を含め収支の詳細について確認をいたします。
- ◎指定の様式により実施報告書を提出すること。(事業終了後1ヶ月以内)
※採択された事業は高知県芸術祭執行委員会等が視察します。
- ◎後日開催予定の事業実施報告会に必ず参加すること。
(令和5年1月22日(日)開催予定)
※報告会参加に伴う旅費等の費用は各自ご負担ください。

申請方法

申請期間内に、規定の申請書様式(第1号～3号)に必要な事項を記入し、高知県芸術祭執行委員会事務局まで持参、もしくは郵送にてご提出ください。
※申請に際しましては、助成金申請の手引きをご参照ください。芸術祭公式HPからご確認ください。
※申請書様式は、芸術祭公式HPからもダウンロードできます。
※申請書様式を送付希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。
※申請後、電話等によるヒアリング、追加資料の提出等を求める場合があります。
※過去採択団体の実施報告等は芸術祭公式HPに記載しております。申請にあたってご参照ください。

申請締切

令和4年6月10日(金) ※当日必着
(持参の場合は、17時まで)

選考方法

書類選考による一次審査を行い、追って二次審査会にて代表者等の出席のもとプレゼンテーションを行っていただき選定します。

[令和4年7月3日(日)開催予定]

結果は二次審査会后、全ての申請団体または個人に郵送にてお知らせします。
※一次審査のみで採択になる場合もあります。

助成金の交付

所定の請求書を受領した後、2週間以内に指定口座にお振込みします。
※助成金の交付の目的を達成するため必要があると認められた場合は、助成金の2分の1を超えない範囲で概算払も可能です。

申請書等郵送先

〒781-8123 高知市高須353-2 (公財)高知県文化財団内
高知県芸術祭執行委員会事務局 宛

選考結果

30団体・30事業応募、15団体・15事業選定 ※内、1事業中止(助成金支給)

事業実施報告

※原則として、団体が作成した事業実施報告書をもとに掲載

※順番は、公式ガイドブック掲載順

高知街ラ・ラ・ラ音楽祭2022

※台風14号接近の影響により中止

※中止決定までの準備等に要した費用を助成

団体名:高知街ラ・ラ・ラ音楽祭実行委員会

事業の内容

高知市中心部の屋外を会場に、公募により集まった高知県内外の演奏家による音楽祭。台風14号接近のため中止した。

成果・反響

中止の連絡に対し、主催者を労う声や、次回開催に向けて応援されるという声をいただきました。

助成を受けたことによってできたこと

印刷費など事前にかかった経費が全て赤字になることから、金銭的負担を軽減することができました。

(助成額:20万円)

Kochi art warming 第2回公演『真夏の夜の夢』

団体名:Kochi art warming

開催期間:令和4年9月25日(日)

会場:土佐市複合文化施設つな一で・ブルーホール
(土佐市高岡町乙3451-1)

入場者数:241人

事業の内容

高知県に所縁のある多様なジャンルで活動するアーティストで構成。コロナ禍により新しい生活様式の模索を余儀なくされ、改めて文化や芸術の持つチカラで何が出来るのか?を考えた時にその「想い」を共有する仲間たちが融合し「アート(芸術)で心を温める=art warming」をコンセプトに活動する場を創り、アーティスト自身や地元高知(地域社会)がより元気になるってほしいとの願いを持って文化芸術公演活動を行う。

成果・反響

「ジャンルを超えたアート」を目標に、サポートメンバーも加わり、第1回公演になかった楽器やお笑いコンビによるコントなども融合し、作品がより膨らんだ。多ジャンルのアートが集まった舞台となると、どうしてもショーケース的な形になる場合が多いが、「真夏の夜の夢」というシェイクスピアの古典喜劇を軸にすることにより、一つの「舞台芸術作品」となったのではないかと。また、目標である「ジャンルの枠を超えた新しい試み」ができた。その中で、参



「KOCHI ART PROJECTS 2022」に関する問い合わせ先

高知県芸術祭執行委員会事務局 〒781-8123 高知市高須353-2 (公財)高知県文化財団内

TEL.088-866-8013

✉ k_geijyutsu-sai@kochi-bunkazaidan.or.jp
【公式HP】https://www.kochi-art.com/

FAX. 088-866-8008【受付時間 平日9時～17時】

📍 https://www.facebook.com/kochi.art/



公式HP



Facebook

加メンバーがコラボレーションの新しい可能性を感じていることも成果の一つである。

反響も大きく、「今までに見たことのない舞台だった」「一度にたくさんのアートに触れることができ、盛り沢山な内容に満足」という感想からも、団体の想いが伝わったことを実感できた。また、「高知にこんなにたくさんのアーティストがいたなんて知らなかった」「ライブやコンサートにも行ってみたい」など、感想もいただいたので、それぞれの活動をSNS等でも発信しながら、それぞれのアートへと還元し、さらにKochi art warmingへの活動へとつなげていきたい。

助成を受けたことによってできたこと

照明、音響、舞台装置にかかる経費に充てられた。照明により、幻想的な世界に観客を引き込んだ。音響により、より良い音環境で生演奏を観客に届け、作品を進行することができた。舞台装置では、会場のある土佐市に関連する「綱」を森の木々に見立てるなどの美術で、現代と過去をつなぐ効果が見られた。結果、「アーティスト」だけでは絶対にできない作品となり、ラストシーンで会場から自然と拍手が起こり、温かい空気に包まれたのはとても印象的だった。

(助成額:30万円)



高知市魚の棚商店街アートマルシェ

団体名: 高知市魚の棚商店街協同組合

開催期間: 令和4年10月1日(土)~10月31日(月)

会場: 高知市魚の棚商店街
(高知市はりまや町1-9-3)

入場者数: 約500人

事業の内容

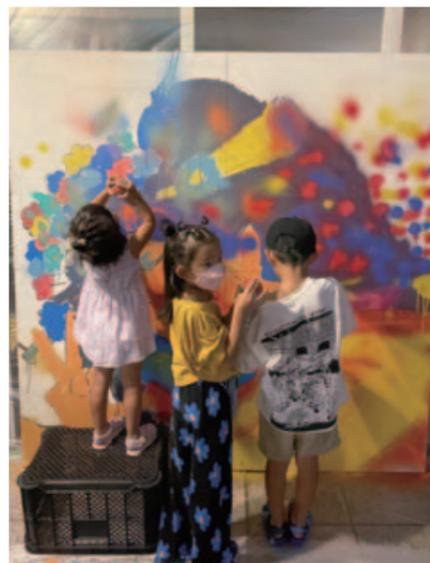
レトロ、日本文化、絵金、狐の嫁入りをコンセプトにした祭り「魚の棚アートマルシェ」を初日に開催。同日に行われた「狐の嫁入り」をメインイベントとし、来場のお客さんもインクで塗ることができる参加型の巨大キャンバス公開制作(絵金オマージュ作品)や、商店街に隠された3Dプリンタを用いた立体作品を来場者が見つけ出す宝探しゲーム、音楽の演奏、くじ等のイベントを実施。また、県内の飲食店やハンドメイド作家がブースを出展。魚の棚商店街のシャッターを横長の絵巻物に見立てた巨大鳥獣戯画の制作展示をした。

成果・反響

後継者問題…今回のイベントを通じ商店街内の若いメンバーが中心となり、「この街を盛り上げよう、この街を何とかしなくてはならない」という意識が芽生えた。

商店街の認知…若者メンバー中心で行ったことで、普段商店街に来た事がないような若者カップルや小さなお子さん連れの家族が多く来場し、SNSで拡散等をしていただいたことで、公式HPやFB等の閲覧数が伸び、出店者の方には「この商店街で店を出したい」と申し出があり、空き店舗対策の一助にもなった。

商店街の活気…古びた商店街が子供を含む多くの来場者の笑顔で活



気づいた。また、高齢者メンバーからは昔を懐かしむ声が多く聞こえ、若者メンバーと、学生メンバーとの世代を超えた交流が生まれた。

助成を受けたことによってできたこと

魚の棚商店街は江戸時代から続くと言われ歴史こそ長いものの、商店街とは名ばかりで、2020年に誕生したばかりです。また、台所事情も、町内会から引き継いだ経費は協同組合立ち上げ費用で使い切り、逼迫した状況であった為、若者メンバーから「何かやりましょう!」と言われても言葉を濁していました。そんな中、今回のきっかけをいただき感謝します。

(助成額:30万円)

①邦楽器による【しばてん物語】と音楽 ②琴と三味線のお話と音楽~金林寺~

団体名: 松村紫乃&グループ琴

開催期間: ①令和4年10月8日(土)
②令和4年12月13日(火)

会場: ①高知県立美術館ホール(高知市高須353-2)
②金林寺(安芸郡馬路村大字馬路4281)

入場者数: ①302人 ②23人

事業の内容

①土佐民話しばてんを題材に脚本と音楽を委嘱し発表。作品をつくることで、県内外に高知をアピールする。ピアノ、ヴァイオリンの洋楽器と邦楽器のコラボレーション曲や、古典をロックテイストにアレンジした曲等を演奏し邦楽器の可能性を感じてもらおう。

②なかなか邦楽を聞く事が少ない地域で箏や三味線の歴史や楽器の仕組みを解説しながら演奏を行う。また、観客の方にも体験で実際に楽器に触れてもらい地域の方との交流をはかる。

成果・反響

①お客様感想:「プログラムが充実しており大変面白かった」「洋楽器と邦楽器の演奏がマッチして他の楽器とのコラボレーションも聴きたい」「しばてん物語を施設や学校などで読み聞かせとして演奏してもらいたい」

ホール関係者感想:「最近行われた演奏会の中で一番充実していて観客が何よりも楽しそうに聴いていて、またすぐに演奏会をしてほしい」

②お客様感想:「丁寧な解説とお話で一層箏や三味線を身近に感じられた」「ヘリオドールがとても感動し是非CD化して欲しい」「楽器に触れることができ心が弾んだ」

助成を受けたことによってできたこと

・観客が楽しめるように舞台演出に力を入れ、委嘱作品を作成することができた。

・東京から芸大卒の演奏家を招くことができ質の高い公演ができた。

・馬路村公演では、観客とコミュニケーションをとることにより、アーティストも心の充実を得られ、より一層音楽を楽しんでもらえるよう高い意識を持つことができた。

(助成額:30万円)



牧野富太郎伝 ①草木の人 ②草を褥に

団体名: 劇団 the・創

開催期間: ①令和4年10月23日(日)②令和4年12月3日(土)

会場: ①佐川町立桜座(高岡郡佐川町甲346-1)
②本山町プラチナセンター・文化ホール
(長岡郡本山町本山569-1)

入場者数: ①581人 ②268人

事業の内容

牧野富太郎の生涯、子供時代―青年―老年をまわりの人達とどう関わってどう生きたか、また、富太郎のメッセージは何なのかと生きる意味を演劇として発信した。

成果・反響

富太郎の生涯を知ってよかったという感想と同時に妻・寿衛子の存在が観客の共感を得た。自分自身の生き方を問いながら、一筋に生きるという事の美しさ、それを自分の人生に重ねたい。そして花や草が今まで以上に愛おしく、共に生きていきたい等、多くのアンケートをもらった。

助成を受けたことによってできたこと

佐川、本山で1,000円の入場料を徴収して満席にしても経費の面では大赤字になる事は分かっていたが、助成金のおかげで二地域での公演を成功させる事ができた。

(助成額:30万円)



土佐山田・あーとリンク vol.2

団体名: 土佐山田・あーとリンク実行委員会

開催期間: 令和4年10月29日(土)～11月6日(日)

会場: ギャラリー樹下の舎、かふえ&ぎやらりーぐらんま、香美市立美術館、等

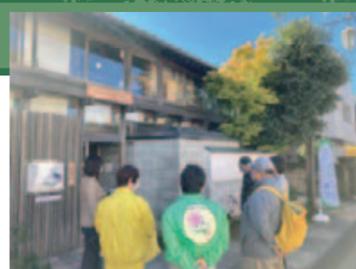
入場者数: 353人

事業の内容

アートを通じた地域活性を目指して発足した「土佐山田・あーとリンク」の二回目となる本事業では、香美市立美術館で開催される「写真絵画の実力―リアルとは何か―」展に合わせ、土佐山田町内二つのギャラリーにて県内作家による展示を同時開催し、三つのアート施設を結びました。各施設を巡回する仕掛けとして、まち歩きマップの作成・景品付きスタンプラリー・協力カフェによるコラボメニュー提供などを企画し、まちを楽しみながらアートに触れる機会を創出しました。香美市観光協会や香美市観光ガイドの会と連携し、10/30にはまち歩きガイドツアーも開催しました。

成果・反響

約4割の方が昨年のリピーターとして参加くださいました。展示して欲しい作家のリクエストや、「空き家などを利用して多くの作家に参加してほしい」「図書館もイベントに活用してほしい」など、様々な声をいただき、次回への期待が高まっていることを感じました。



助成を受けたことによってできたこと

昨年に続き、3施設合同での展覧会を開催することができました。まちあるきマップ付パンフレットの作成や、3会場を巡るスタンプラリーによって、多くの方に各会場を巡ってもらうことができました。また、会場のサインとして作成したのぼりによって、イベントの存在をアピールすることができました。

(助成額:30万円)

しまんと景観デザイン研究所 ～むこうはどこだ。～

団体名: 下田応援隊

開催期間: 令和4年10月31日(月)～11月6日(日)

会場: 四万十川河口・四万十市下田地区

入場者数: 約180人

事業の内容

1. 地域外アーティスト等の現地滞在による作品制作

下田地区のお寺・光明寺(宿坊)を滞在拠点に5組の作家が滞在。以下作品制作を行った。

- (1)小川智彦(ランドスケープアーティスト・船大工見習い/京都市):河口エリアの撮影、船大工の道具や川船のリサーチをもとにした作品制作
- (2)Takako Hamano(アーティスト/アムステルダム市):河川(特に船)の祭礼・風習をテーマに小・中学生対象WSを開催、伝統船を飾る作品制作
- (3)しこくゲージツツ通路座/濱田公望(映像作家/いの町)、松岡美江(美術作家/いの町):四万十川を素材にした映像作品制作、河口域の景観にマッチする造形作品の展示空間づくり
- (4)ナカヨシ(クリエイティブユニット/四万十市):下田地区に残る、使われていない伝統的な川船の「イベント時の公開修復WS」の計画立案
- (5)大学生合同チーム(京都芸術大学・名城大学・高知工科大学):歴史文化のリサーチを元に、古民家の清掃および展示空間制作、学生プロジェクトの提案パネル制作、川船の盧や櫂をモチーフにオール制作(高知県森と緑の会補助金)

2. 地域PRを目的とした作品発表イベント

- (1)現地滞在を通じて制作した作品展示(10/31～11/6)
- (2)アート作品や地域資源を巡る「しもだ自転車ツアー」(11/3)
- (3)地域の伝統芸能「こども太鼓台!練り歩き」の開催(11/5)
- (4)「こぎ出そう!伝統的な船行事の復活」の開催(11/6)※中止
- (5)「アート×福祉シンポジウム」(主催:高知県社会福祉法人経営青年会)

成果・反響

・下田地区(四万十川右岸)および左岸を含む「四万十川河口」エリアを、アートを含んだ着地型観光の取り組みとして、今後も連携を強化したい。(四万十市観光協会)

・この取り組みをきっかけに、大学生が自主的に下田地区で活動するプロジェクトの提案につながった。(名城大学・高知工科大学)

助成を受けたことによってできたこと

・活動予算(助成金)があることで、イベントが開催でき、地区の賑わいにつながった。

・地元だけでは開催が難しかったが、アーティスト等の助力を得て充実した取り組みになった。

・アーティスト、大学生、高校生など、様々な領域から地域外の方にきていただき、今後のネットワーク形成につながった。

(助成額:30万円)



ファインダー越しに見る室戸ユネスコ世界ジオパーク～地域の自然と人の暮らし～

団体名: 室戸世界ジオパークセンター

開催期間: 令和4年11月1日(火)～12月10日(土)

会場: 室戸世界ジオパークセンター(室戸市室戸岬町1810-2)

入場者数: 3,187人

事業の内容

室戸市全域をそのエリアとする室戸ユネスコ世界ジオパークで撮影された写真を対象に、フォトコンテストを開催。単に地質・地形を対象にせず、室戸の自然環境の中で、どのような文化が紡がれてきたかを表現することをテーマにし、作品を募集。集まった作品は写真展にて掲示し、「ジオパーク＝地質・地形」という誤った認識から、「ジオパーク＝地域の自然(地質・地形)と人の暮らしの関係がわかる場所」というメッセージを発信した。また、室戸高校生による撮り下ろし写真展「僕らの室戸ジオパーク」も同時開催し、高校生の視点を通して室戸がどのように見えているのかを表現した。

成果・反響

フォトコンテストへの応募総数は40点。そのうち大賞1点を含む5作品が審査の結果入賞作品として、他の応募作品と合わせて写真展で展示された。また、新たな試みとして「来場者特別賞」という賞を設け、写真展を見に来てくださった来場者の方にお気に入りの作品を選んでもらい、最も得票が多かった作品を選定した。140名の方が投票していただき、来場者参加型の写真展を開催することができた。

助成を受けたことによってできたこと

高知県在住の天然写真家である前田博史先生に、特別審査員としてご協力していただいた点は、とても大きな成果であった。前田先生からは各作品に対して講評もいただけたので、作品応募者にとっても大きな励みになり、室戸ジオパークについて新規層に知らせることができた。室戸ジオパークのテーマとするものと、写真の親和性は高い。今後も写真をテーマにしたイベントを、積極的に開催できることがわかった。

(助成額:21万円)



いしはら音楽祭～紅葉彩る三宝山福寺コンサート～

団体名: いしはらの里協議会

開催期間: 令和4年11月5日(土)

会場: 三宝山福寺(土佐郡土佐町西石原1115)

入場者数: 【会場】45人 【サテライト会場】約10人 【ライブ配信視聴者】約20人

事業の内容

土佐町石原地域において文化芸術による地域活性化を目的とした音楽祭を実施。昨年、一昨年同様、地域のお寺である三宝山福寺を会場に土佐町在住のジャズピアニスト・鈴木琴栄さんや四国唯一のプロオーケストラ・瀬戸フィルハーモニー交響楽団による木管四重奏(昨年度は金管五重奏)を招聘し開催。音楽と地域、紅葉含めた会場の雰囲気の3つが合わさった音楽イベントとなった。

成果・反響

・来場者からは、「音楽が良かった」や「紅葉が綺麗」などの声があり、演奏やお寺の雰囲気について、昨年に引き続き好印象であった感じがある。また、高知大学地域協働学部生も実習として運営に協力いただいたことで、より地域の取組を地域外に知ってもらえるきっかけになったのではないと思う。

・地域内で予定されていた他のイベントがコロナで中止されたこともあり、今年最初の地域の若手を中心となって運営するイベントとなった。このように、地域にて文化芸術に触れる機会を創出するだけでなく、コロナ禍においても地域活動を実施していく体制を模索することで、地域の交流活動を維持できることを示せた。

助成を受けたことによってできたこと

助成を受けたことで、昨年度に引き続き、プロによる質の高い演奏に触れる機会を作ることができたとともに、高知新聞やSNS等で周知することにより、当地域を知ってもらうなど今後の交流のきっかけになったのではと思う。(助成額:30万円)



第三回いとひょう沈下橋アートプロジェクト

団体名: 松葉川青年団

開催期間: 令和4年11月19日(土)

会場: 一斗俵沈下橋、城ハナ公園、米奥小学校周辺

入場者数: 約200人

事業の内容

松葉川の名産・文化である農業(生姜作りや稲作など)を地元の子供達に誇りを持ってもらえるように、「農業」をテーマに開催した。主に一斗俵沈下橋周辺(城ハナ公園など)を会場として、事前に地元小学校の児童にワークショップに参加してもらい「テントアート作品」を展示した。また、デジタル技術を利用した「プロジェクションマッピング」や地元住民グループ(西影山歌劇団)などによる音楽イベントを行った。中山間地域である松葉川地区をより好きになってもらうきっかけとなったイベントが開催できた。

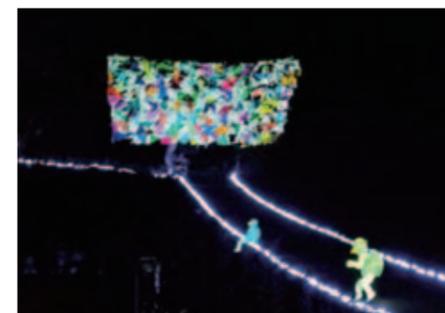
成果・反響

多くのイベント参加者から「夜の沈下橋周辺での光るアート(テントアート・河童アート・若葉アートなど)が綺麗だった」「プロジェクションマッピングが映像だけでなく音楽も一緒に上映だったので迫力があって」「松葉川青年団にもっと頑張ってイベントをやってもらって今後も松葉川地域を盛り上げて欲しい」などの声を頂きました。

助成を受けたことによってできたこと

どうしても大きな費用がかかってしまう「音響設備」「謝金(プロジェクションマッピングなど)」の支払いなどに有効活用させて頂きました。「KOCHI ART PROJECTS」助成事業の冠での広報・PRにより参加者が増加。

(助成額:30万円)



過去から未来へ「南海トラフで芸術は死にますか？」 (東日本大震災からの声) 芸術の四国遍路展・高知編

団体名: 芸術ハカセは見た・Art nest YOMO
開催期間: 令和4年11月23日(水・祝)～12月4日(日)
会場: ファウストギャラリー(高知市本町1-2-22)
 Art nest YOMO(高知市北本町3-11-35)
 Equivalent(高知市朝倉丁354)

入場者数: 216人

事業の内容

2020年2021年に徳島城博物館にて開催された「芸術ハカセは見た」を引き継ぎ、東北石巻市に移住し復興活動を行いながら関東のアートと連携を行ってきた現代アーティスト、パルコキノシタ氏(58歳/徳島出身)の活動経験を活かし、震災から10年の節目の本年、南海地震の予見される地元四国で、芸術のもたらす可能性を探る活動として、徳島だけでなく四国そして東北のアーティストネットワークとなる活動として、高知のアーティストを主体とする文化的接点となる展覧会を開催し、アートの可能性を開拓することのできる場づくりを模索しました。

前回の芸術の四国遍路展(2022年2月)では、社会システムが災害や行動制限で揺らぐ中、公とは対極に個々固有の力に注目し、独自の視点から個の表現を生み出すオルタナティブスペースなどを母体とするアーティストのネットワークの再構築の試みとして、四県巡回展示の形で四国所縁の作家13名に声をかけました。今回は前回の「四国遍路」と「震災」の主題のうち、「震災」により中心を置き、東日本大震災以降東北でのアートの活動と数十年後に起きると予測される南海トラフへの視点として、東北と高知所縁の作家9名による展示とトークイベントを行いました。

成果・反響

美術館・アート関係者へのアプローチや、地元のアートの持続を担う層、自治体関係者や大学の研究として震災への意識のある方々にも展示とトークの両方で鑑賞とご参加をいただけて働きかけの場となったのではないかと思います。

助成を受けたことによってできたこと

東北からの作家でトークに登壇した村上氏とパルコ氏は、被災地現地に入る際の衣食住の設備の全てを自前で揃えた仮設トラック2台に乗って今回高知入りし、開催期間中の展示会場在廊時間以外で、南海トラフが起きる前の活動と記録として、高知の海岸線沿いの現在の写真をgoogle上にスポットを設定し記録する試みも行った。遠方東北からの協力ということで、移動などの経費が多くかかったが、仮設トラックの活用で高速道路での移動や宿の経費の他に、車中泊を行い節約に努め、その上でなお助成金の援助がなければ実現できなかった部分だったと振り返る。前回と今回の記録冊子としてカラーA5 36頁とモノクロの別冊として助成の支援を受ける形をとることで、条件や完成の質などを考慮し、自己負担部分を少し増やすことで、当初の予定の50冊から300冊の作成が可能になった。

(助成額:30万円)



PaperAA! ～赤れんが商家を使ったインスタレーションと映像ワークショップ～

団体名: Washi+

開催期間: 令和4年11月26日(土)～12月4日(日)

会場: 赤れんが商家(香南市赤岡町772-1)

入場者数: 【WS参加者】23人 【鑑賞者】61人

事業の内容

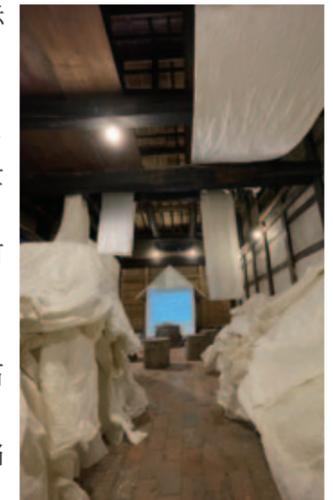
芸術を通して和紙の普及を目指す「Washi+」のプロデュースにより、伝統民家「赤れんが商家」において、「Paper House」の展示、コマ撮りアニメーションのワークショップと上演を行いました。ワークショップは11月26日・27日に行い、展示と上演は12月3日・4日の赤岡の冬の夏祭りの開催に合わせて行いました。

成果・反響

アンケート結果から、展示に関して「別空間が出来ていてびっくりしました」「紙のアート空間にペーパーボーイの世界をみました」など、伝統民家と和紙の親和性を強調した世界観を展開することができました。また、楮の蒸し剥ぎワークショップも好評を得て、「いの町へ手伝いに行きたい」との声や、「赤れんが商家をこんな風に使ってみたいが可能か?」など今後の展開につながる問い合わせもいただきました。

助成を受けたことによってできたこと

遠方に住む作家やサポーターを招聘し共同運営することができました。東京からの2名(石山優太、原啓太)は約10日間の町に滞在しながらWS補助、展示の準備、赤岡町での設営、当日運営などを行いました。また、あにめのいろはのまさきさんは準備段階、WS当日、展示当日と、複数回にわたって大月町と赤岡を往復し、企画に参加していただくことが出来ました。(助成額:30万円)



第33回高知版画協会展・徳島版画交流展

団体名: 高知版画協会

開催期間: 令和4年11月30日(水)～12月11日(日)

会場: いの町紙の博物館(吾川郡いの町幸町110-1)

入場者数: 1,000人

事業の内容

高知版画協会の主催による展覧会。33回目となる本展は、徳島版画協会との交流展もあり、徳島の阿波銀プラザでの同時開催となる。様々な技法で制作された版画作品を展示し、期間中は版画ワークショップも開催。

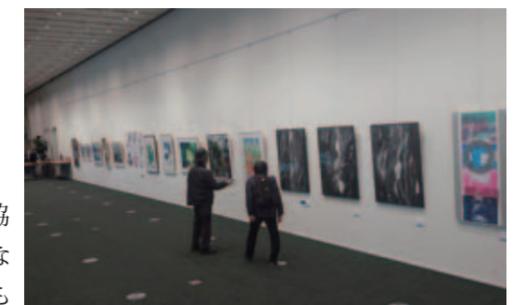
成果・反響

- ・高知で見ることのできない版種の作品が見られて良かった。
- ・徳島と高知の比較がおもしろい。
- ・珍しい版画技法をワークショップで学べて良かった。
- ・見応えのある展覧会でした。大きな版画作品も見られて良かったです。

助成を受けたことによってできたこと

普段は高知版画協会の会員だけで開催している展覧会だが、作品運送費、交通費等を助成金で補えたことにより、徳島との交流展を行うことができた。また、徳島から講師の先生をお招きしてワークショップも行った。

(助成額:24万円)



第2回「宿毛寄席」in林邸

団体名: 宿毛寄席実行委員会

開催期間: 令和4年12月3日(土)

会場: まちのえき林邸(宿毛市中央3-1-3)

入場者数: 【宿毛寄席】68人 【林邸縁日】約60人

事業の内容

歴史ある建造物まちのえき林邸で宿毛寄席を開催。お喋りのお題はどちらも宿毛に関わるもので、寄席を楽しむだけでなく、地域の歴史を知る機会を与える。屋外では、和を楽しむ林邸縁日を開催、野点傘や提灯台をフォトスポットとして宿毛高校の地域貢献部が写真を撮影し和柄フレームの写真をプレゼント、またおしるこ、お弁当、水引細工など出店者で賑わった。

成果・反響

- ・林邸の趣にマッチしているイベントだった。固唾を飲んで聞き入っている観客が印象的だった。
- ・講談と落語の両方が生で見、聴ける企画は秀逸だと思います。地元宿毛を絡めた語りに加え竹内明太郎の講談は聴きごたえありました。

助成を受けたことによってできたこと

- ・旅費、謝金等でプロの噺家を2名宿毛市へお招きできた。
- ・会場設営費で「まちのえき林邸」を会場として使用することができた。宿毛市の「土佐の匠」濱中伸也氏の大型組子細工をレンタルでき会場を華やかにできた。宿毛高校地域貢献部の協力も得て、野点傘を設置し、来場客のフォトスポットを設営できた。(助成額:30万円)



晴れる夜に誰かの寝息が聞こえる One of the bear shooters in the world

団体名: 劇団coyote

開催期間: 令和4年12月10日(土)

会場: メフィストフェレス3階(高知市帯屋町2-5-23)

入場者数: 66人

事業の内容

札幌から高知県に移住した演劇人、亀井健が企画。高知在住のミュージシャン矢野絢子の協力により、全国にパンデイロを広めるパーカッション見谷聡一を東京から招き音楽監督として迎え、高知在住のヴァイオリン奏者、嶋崎史香を加え、1人芝居を音楽劇と昇華させていく、演劇と音楽の融合で、高知県で新たな創造性を生み出す事に挑戦しました。

成果・反響

- ・言葉の力と、音と音楽と、すごい濃度だった。
- ・バラバラのパーツがまとまっていく感じが素晴らしかった。健さんの声が特別。

助成を受けたことによってできたこと

コロナ禍が収まる気配がない中、東京からゲストを招き、配信の段取りも滞りなく行うことが出来ました。そしてまだ移住して数ヶ月で、芸術祭の印刷物により新しい出会いがありました。高知県という場所に少しでも受け入れてもらう事ができたと信じております。ありがとうございます。(助成額:23万円)



助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2022」 事業報告会

開催日 令和5年1月22日(日)

会場 高知県立美術館・1階講義室

参加者 32人(報告者含む)

<プログラム>

1. あいさつ 高知県芸術祭執行委員長 新納朋代
2. 助成事業報告(14団体)

～議事抄録～

高知街ラ・ラ・ラ音楽祭2022



この催し自体、ご存知の方は多いと思う。第1回を行った2002年は高知国体が開催された年で、高知市の地域コミュニティ推進課(旧まちづくり推進課)で高知市中心街を盛り上げようと吉澤文治郎氏(ひまわり乳業(株)現社長)ら2名が中心となり高知市からまちづくりの予算を頂いたのが始まり。催しの内容は中央公園など高知市の街中に複数のステージを組み、公募によって集まった県内外の演奏団体が出演するというもの。

特筆すべきは、最初は高知市のまちづくり推進課が事務局として運営していたが、事業が大きくなったことで、高知市の

手元を離れ、独立した実行委員会になった点である。ただしそれにより、事務局が無くなり、会議室はひまわり乳業(株)のものを借り、事務局もそこに置かせてもらう流れとなった。また行政からのお金がなくなったため、パンフレットに掲載している協賛広告と参加者からの参加料で運営にかかる費用を賄うこととなった。その後の取組は高知市文化振興事業団にも通じるものがあると、予算は付かないが問い合わせや申し込みの窓口等としてサポートする形となっている。そういう形で20年近くやってきているが、正直予算の後ろ盾がない催しである。

また、今回は台風が接近したため中止にしたが、過去には、(収入が協賛広告料と参加料のみで返還できないという理由から)悪天候でも決行せざるを得なかったこともある。協賛広告も開催前には入金されないため、終了後に印刷代や会場にかかる費用を支払う自転車操業をしていた時期もあったが、他の助成金も頂くなど、少しずつ経営も改善している。今回、コロナ禍を経て、3年ぶりに開催が決まったが、台風の影響で中止した為、事前にかかる印刷代等がマイナスになり、かなり厳しかったが、助成いただいたことで助かった。

協賛広告を頂ける企業、参加者共に今年は減っており、それ以外の収益を上げる方法、かかる経費を抑える方法というところで岐路に立っている。定期的な催しで9月の3週目に開催しているが、来年以降どうするかという課題が残る。助成金を当てにしていける形が健全なのか、最終的に自立を目指すのか。助成金に頼りきりになるのはいけないと分かる一方で、大きな予算規模の催しをどう続けていくかはこれからの課題でもあり、ご意見を頂ければと思う。

◆質疑応答

Q.台風の時期であるため、例えば開催時期を9月から10月に変える等の検討は?

A.中央公園は夏から秋にかけて、週末や祝日に定期的な催しが入っており、過去にも10月にずらそうとしたが、会場が取れなかった。どこかのタイミングで定期的なイベントが無くなるか、時期がズレたりすることで10月に開催できるのではないかとと思うが、長く参加されている方には9月の3週目の3連休の中で開催するということが浸透している。実行委員の中では時期をずらせないかという声は出ている。

Q.資金があればもっと良い音響でできたりすると思う。かなり多くの方が参加され、見に来られるので、もっとカンパを呼び掛けて、催しを市民で支えていけないか。

A.音響は最初の頃よりは改善されており、2009年くらいからは会場ごとに別の音響屋さんに依頼し、音響屋さんを紹介することで、それぞれの個性を知ってもらうようにしている。資金面では、皆さんに寄付金をお願いすることは積極的に行っており、出演者の交代の際、司会者が募金の呼びかけを行ったり、オリジナルグッズの販売収益を運営に充てたりしている。会場ごとに、募金や物販を競い合っているが、それでも厳しいのが現状。

Kochi art warming 第2回公演『真夏の夜の夢』



事業の内容としては、高知在住で活動する様々なジャンルのメンバーがコラボレーションして一つの舞台をつくる2回目の公演を行った。

成果・反響について、2021年2月14日に第1回公演をした時は、約10人のメンバーはお互い知っている者もいたが、そうでないメンバーもあり、お互いの探り合いで少し遠慮するところもあった。しかし、2回目となると気心も知れてより踏み込んだコラボレーションになったように思う。反響としても「今までに見たことのない舞台だった」や「色々なジャンルのものが見られて、どんどん展開して行って、それが繋がって

いるのが非常に面白かった」という様な意見も頂いた。

活動のきっかけは、アーティスト活動を生業としているメンバーが、コロナ禍の影響で一時期収入源をほぼ断たれるという事を経験し、そんな中で何が出来るかを、主宰のマサコ・バレエ・ワークスの上岡が中心となり、知り合いに声を掛けて行って集まったことが始まり。表に立つ出演者、アーティストと呼ばれる者達だけで最初は集まったが、普段から見に来て応援してくれているお客さんも鑑賞の機会が無くなっていることや、音響や照明、美術などの裏方さんも仕事が無くなっているということもあり、三方よし、出演者もお客さんも裏方さんもみんなに良い様なものをつくっていかないとというのが元々のねらいである。

成果としては、私自身はサンドイッチパーラーという名前で、ポップスのジャンルで音楽活動をしており、例えばダンスや演劇などの違うジャンル同士と一緒にやる事で、つくっていく時間の流れ方やプロセスが全然違うという事を一緒に経験できたのは大きかったと思う。また、第1回に比べて第2回はさらに踏み込んだことができた。今回参加していないアーティスト仲間とも、そういった話を共有し、自分たちの気付きを少しずつ広げられているのが良い点である。

収支決算について、事業費は全体で約150万円かかっており、その中でも30万円という少なくない金額を助成いただいた。自己負担金の35万円は、自分達の持ち出しもあれば、過去の出演や慰問コンサートで頂いたお金をここに回したが、助成金が無ければもっと負担をしなければならなかったし、舞台装置や音響照明もかなり簡易な物にしなくてできなかったのではないと思う。特に舞台装置で、土佐市にある会場つな一での名前にも入っている綱を、森の木々に見立てるために柱状に立てて、舞台の上手に設置し、その周りで物語が進んでいく様にした。土佐市といえば綱というイメージを持っている人がどれだけいるか分からないが、会場に合わせた地元色を取り入れてやることでできて良かった。

今回公演したシェイクスピアの「真夏の夜の夢」について、ほとんど知らないメンバーがわたしを含めていたので、(元々使われているクラシックの曲がシーンごとにあっただ)あえて、セリフの台本だけ頂いて、このシーンにどんな音楽を合わせるか、このやりとりでどんなパフォーマンスをするか、誰と誰を組み合わせるかもある程度、演出担当から任せられる状態だったが、それが却って上手くいった部分があるのではないと思う。元々お芝居や演出をしている者が演出担当だったが、「大変苦労したが、自分の中で新しい可能性が見えた」と話していた。

このように色々なジャンルの人がコラボレーションして大きなホールで公演をし、何百人が見に来てくれるという機会を、自分を含めた高知で活動をするアーティスト、パフォーマーはなかなかつくれていないのが現状だと思う。自分達アーティスト、裏方さん、そしてお客さん、みんながいつも良い状態に舞台が進んでいくには、興行として成り立つ、つまりチケットがしっかり売れて人が入ることを目指していかないといけないと改めて思った。

前回に引き続きライブ配信を行い、通常の会場チケットは3,000円で、ライブ配信が半額の1,500円にしたが、価格設定については自分達の中で色々な意見が出た。「画面で見ただけからといって半額という安さでいいのか」という意見や、「現場で見るよりは、画面で見る方が鑑賞体験としては少し落ちるから、半額か1,000円でもいいのではないか」という意見もあったりした結果、この価格にした。おかげさまでライブ配信の売上は約11万円となった。配信サービスの中に“応援投げ銭”という、元々の1,500円から任意で追加料金を支払っていただけるシステムがあり、その金額が大きかったものもある。また、会場で見に来てくれたお客さんが、もう一回見たいと後日配信チケットを買って見てくださったという話も結構耳にした。いずれにせよ、収入面だけではなく、後でもう一回見たいと思っていただいたことが非常に嬉しいことだと思う。

◆質疑応答

Q.これだけの幅広いジャンルの方々が1つの作品に取り組むにあたって、練習等のスケジュール調整をどのようにしたのか。

A.全体が集まった稽古は正直そんなに回数を重ねられていないが、それぞれのコラボでシーンが展開していくので、この人とこの人だけで合わせるということはある程度やっておいて、全体が集まった時にそれらを繋ぎ合わせていくことで上手くできた。

Q.なぜ会場をつな一でにしたのか。

A.つな一での設計をした建築士の山本直子が舞台監督を担当したことや、つな一で子供達向けのミニコンサートやワークショップを去年とそれ以前にやらせていただいたことが理由。色々な空間が連続しているという独特の作りをした建物で、それを活かしたパフォーマンスを以前からやっているため、今回もつな一でにした。今後は、つな一で同等規模の、県内にある他の会場でもできたらいいと思う。

高知市魚の棚商店街アートマルシェ



今回の事業は、若いメンバーだけでやってみようという実行委員会を立ち上げて行った。私達は10月1日にイベントを行い、そこから10月31日までの1ヶ月間アート作品の展示をする、アートを通して商店街を活性化させるイベントを企画、開催した。

毎年、はりまや橋商店街で絵金生誕祭を開催しており、そのイベントの一環として狐の嫁入りという妖怪に仮装した人達と、狐に仮装した花嫁花婿の行列が高知八幡宮から魚の棚商店街、はりまや橋商店街、帯屋町を練り歩くイベントがあり、今年は魚の棚商店街もコラボして、イベントを開催して

盛り上げを後押ししようと思い、計画した。

はりまや絵金生誕祭と同時開催のイベントということで、江戸絵画、妖怪、日本文化、レトロ等をコンセプトにし、飲食店は魚の棚商店街を中心に7店舗、アート作品展示、ライブペイント、東高校美術部など5名、DJ6名に出演いただいた。あくまでメインの催しは狐の嫁入りの行列で、その雰囲気盛り上げるために、演出をいの在住のキャンダルアーティスト、モーキャンダルさんに依頼した。お子様にも楽しんでいただくために宝探しも開催した。3Dアートの狐のフィギュアを商店街の複数個所に隠して、全て見つけた来場者の方に景品をプレゼントするもので、狐のフィギュアを魚の棚商店街の造形作家に依頼し、景品を魚の棚商店街の八百屋さん、お肉屋さん、着物屋さん等をお願いした。宝探しはお子様に大変喜んでいただき、昔からの商店街の混み合いとお子様の和気あいあいとした交流が見られる等良いものとなった。絵金の作品をみんなで描こうという趣旨で、こちらが用意したペンキや絵の具、スプレー、刷毛等で来場者が誰でも描ける2m四方の大きなキャンバスを制作した。こちらもお子様喜んで参加し盛況となった。BGMも、魚の棚商店街の和風やレトロの雰囲気ふさわしいレコードプレイをDJの方々にしていただき、こちらは大人に好評でおか

げさまで飲食ブースも賑わった。イベント開催時はトラブルもなく、終始和気あいあいとした時間が流れた。

結果として、例年の狐の嫁入りよりも魚の棚商店街の活気があり、初めての方にも多く来ていただいた。魚の棚のベテランの商店街役員の方にも楽しかったと仰っていただけた。若手との結束力も生まれ、とても良いものとなった。

商店街の立場からの報告としては、商店街には排他的な部分があり、後継者問題が存在するが、担い手となる若者をこういう風に巻き込んだことによって、高齢者メンバーとの結束や繋がりができたと思う。また歴史はあるが、商店街として立ち上げたのは2020年で、非常に若い商店街であるため、認知される機会があまりなかった。HPとFacebookは4月に立ち上げたばかりで、現在若いメンバーが活用しているので、今後に期待している。さらに、今回のイベントを若者中心で企画した事で、当初斜めに構えた見方をしていた高齢者メンバーも、多くの来場者の笑顔や子供達の元気な声を聞いて、率先して準備を手伝ってくれたという目頭が熱くなる瞬間もあった。若者メンバーから何かやりたいと言われても、台所事情が非常に逼迫していた中で、KOCHI ART PROJECTSのチラシを見つけ、「やってみよう」と盛り上がり開催をした次第だが、商店街のシャッター化が加速している中で、この様に若いメンバーが事業者さんと一緒にイベントをやってくれた事は、商店街として非常にありがたいことだった。

イベントを通じて、地域活性は新しい物や、有名人を呼ぶ事ではなく、その地域で住み暮らす地域の人々の交流とお互いの思いやりがあって、初めて生まれてくるものではないかと私は思う。また、古臭い物を取り壊して新しい物を作っていくばかりでなく、地域の人々の泥臭い営みによって出来た町並みこそが、その地域の特色であり文化であると私は強く感じた。

◆質疑応答

Q.会期中、昼間は何もやってなかったが、継続的にやれるイベントはなかったのか。

A.シャッター1～2枚分の大きさのスプレーアートの展示を予定していたが、地権者に安全面で指摘された為、やむを得ず中止した。

◆意見

・絵金ははりまや町周辺で10月1日に生まれたと言われていたことを、地元でも知らない人はいるので、生誕祭や狐の嫁入りについてのうんちくを掲げると、文化や歴史とリンクして分かりやすかったと思う。

・宝探しの景品が豪華だったので、助成金事業であることを考慮していただければと思う。

・絵金蔵の元館長が展示ブースで案内をしているところに、来場者が集まっており、飲み食い以外で魅せるところが良かった。

①邦楽器による【しばてん物語】と音楽 ②琴と三味線のお話と音楽～金林寺～



まず、10月8日に美術館ホールで行った「邦楽器による【しばてん物語】と音楽」の公演内容は、邦楽の演奏会ではあるが、洋楽器とのコラボ曲や、しばてんの朗読と音楽などで、観客に楽しんでいただける、また邦楽器の可能性を感じていただけるような内容にした。プログラムは中国二胡と箏の合奏曲。中国二胡もそうだが、大体の邦楽器は中国から伝来しており、故郷とも言える中国の楽器との協演だった。また、古典「六段の調」をロック調にアレンジし、古典と現在とが融合した曲も演奏した。前述した洋楽器とのコラボ曲では、ピアノとヴァイオリンと箏の協演をしたが、今回はピアニ

ストの北村さんにアドバイス等を頂きながらお互いの音色が融合できたと感じた。洋楽器と邦楽器の大きな違いは、間の取り方や余韻の使い方だと感じた。ピアニストやヴァイオリン奏者に支えられながらいい曲が出来たのではないかなと思う。評価もこの曲はとても良かったので、またこれから色々な楽器と演奏していく事が大事だと思った。そして、神奈川フィルが監修している「リバーサルオーケストラ」が現在テレビで放送中だが、神奈川フィルの指揮者の方々がしばてん物語の脚本と音楽で協力してくれた。出演者は朗読しながら音楽も奏でるスタイルで、脚本家が土佐弁に詳しくな

いので、出来上がった作品を高知のおんちゃんに実際に喋ってもらい、録音して、また書き直していただくという、たくさんの方の協力のもとに仕上がった。また公演後に、朗読と音楽作品しばてんを、施設や学校での読み聞かせにどうかという声を頂いたので、今後施設の方や子供達にどういう形で公演ができるかという点が課題である。それこそ、先ほどの洋楽器とのコラボ等。今回演奏した「松の協奏曲」は徳島県出身でオペラ等も書かれた三木稔作曲で、こういった洋楽の作曲家の曲もどんどん取り入れて、邦楽の可能性を広げていきたいと思っている。それから、朗読と音楽のしばてんに関しては男性の語りを女性がやり、違和感があったと思うが、そこは改善の余地がある。最後はアンコールで「ものけ姫」を演奏させていただいた。

この公演は直前までコロナで出演が出来るかどうかということもあり、それぞれ体調管理に気を付けてもらい、また密を避けるため合奏練習を工夫したり、当日は前2列を使用不可としたりと神経を使ったが、たくさんの方々に足を運んでもら嬉しかった。何より、毎日色んな演奏を聞いているホール関係者の方が、「とても素晴らしい演奏会で、何よりお客さんが嬉しそうだったことを、自分達が現場で感じて嬉しくなった。本当にこういう公演を見たのは久しぶりだった。」と話しており、大変嬉しく思った。私も舞台から客席を見て、お客様が楽しんでいるのは感じ取れ、私もそれに応える様に、より一層心を込めて演奏し、ライブのステージは素晴らしいと改めて思う一日でした。

次に、12月13日に馬路村金林寺で「琴と三味線のお話と音楽～金林寺～」を行った。これは楽器の説明、歴史と素材などをお話しながら、曲間にはご住職に説法いただいたり、お茶菓子をいただいたり、実際に楽器に触れてもらうコーナーをつかった。ご住職さんも三味線の体験をされた。また八小節くらいの曲を作って、(楽器に触れられない方は手拍子で)皆さんと一緒に協演したが、それが一番楽しんでいただけたように思う。

この二日間を通して、来てくださる方と一緒に演奏していると改めて感じたので、来てくださる方に喜んでもらえるような内容を目指していきたいと思った。大きな会場、小さな会場でも、これから足を止めないで色々な作品を作り続けていきたいと思う。

◆質疑応答

Q.高知における伝統邦楽の継続と振興、また地域を元気にして、人々に生きがいを与える為の今後の活動と考え方について聞きたい。

A.二つの課題があり、一つは、「あの大きな舞台に出たい」という憧れや目標を持つ若い子達が、その舞台に上がる望みを持つような舞台を作り上げることで、今は子供達に教えて、土地を耕して種をまいて育てていく段階。もう一つは、馬路村で手が届き、振動が伝わる様な距離で実際に弾いて、一緒に気持ちを分かり合う、そういう小さなものを積み上げていく作業が本当に大事で、色々な所に向向いて、その土地の人達と一緒に、手拍子でも何でも一緒に奏でていきたい。そして、県外でもしばてんの曲等、高知の作品をどんどん弾き続けていきたいと思う。

Q.2日間の催しの位置関係はどういったものなのか。

A.大きな会場で団体が公演するものと、小さな会場で少人数がするものとで違い、馬路村の村民の方々は、なかなか市内まで出向いて公演を聞く事が出来ないの、こちらから出向いたという意図があった。

牧野富太郎伝 ①草木の人 ②草を褥に



私達にとって、「牧野富太郎伝」は創立の一番最初の演劇である。色々な劇をする中で、再演というのは普通なかなかできないが、この「牧野富太郎伝」に関してはいろんなところから要請があり、7、8回小劇場も含めて公演した。

特に佐川では、富太郎の生誕160年等の節目で3回上演をし、今回も地域の方が再演を希望したことから出発し、2年間の準備を経て佐川で上演した。その再演という取組の中で、私も演出をする上で自分自身の気付き等を含め、大変勉強になった。

また、本山を選んだ理由は、「牧野富太郎伝」の2回目から大原富枝の「草を褥に」を原作として公演したためである。佐川では牧野富太郎を主にし、本山では高知の宝である大原富枝が最期の死の床で書いたという、富太郎伝をどういうふうにも本山の人、そして高知県民に伝えていくかということを中心にしながら作り上げてきた。

また今回の大きな目的は、演劇という文化をより身近に感じる舞台上、出演者と一緒に、観客にも舞台づくりに参加してもらおうことだった。広く公募し、佐川では役者の約半分が初めての舞台上、私にとっても大きな冒険だったが、半年間で100回以上の練習を重ねる中、(練習代も本山と合わせて10万近くかかったが)みんなが一致団結した。本番当日は、プロもアマチュアも違いはなく、出演者の一人一人が主人公であるという燃え上がりが感じられ、またそれはお客さんにも伝わった。

佐川の昼の公演は満席だったが、一番最初に子供がミスをしてお客さんが笑った。その笑いは、下手だなあじゃなくて、応援の笑い。そしてお客さんが一挙一動泣いたり笑ったり、反応している様子が演者にも伝わり、ものすごくいい舞台だったと思う。また、舞台上で演技しているときに、一幕、二幕とある中で誰一人楽屋にいない、みんなが袖でみんなの演技を見守っている。そして出演者が演技を終え舞台袖から降りてきたら、肩を抱き合せて良かったねと励ます。それは演出の私がする仕事ではあるかもしれないが、一人一人が自らやっている光景を見て、演劇の持つ力をすごく感じた。

またアンケートでは、初めて舞台を見たという回答が多く、芝居を身近に感じてもらうことができた。他にも、「富太郎の生き方とそれを支える人たちの生き方を見ながら、人として生きていく上で大切にしたいことを考えさせられた」や、「本当に芝居の中に引き込まれてその中に自分がある様だった」といった良い感想があった。

観客は、岡山や高松、高知の隅々から来てくれ、その応援団にはものすごく励まされた。佐川と本山の公演なのに、高知から応援団が100名近く来てくれ、それから公演を見た多くの方が、また見たいと本山公演にも来てくれた。それが私達劇団にとって、芝居とは何なのか、何のために芝居をするのか、ということの励みになったと思う。そして、演劇という文化の大きな力を感じ、これから私達がどう演劇をして、どう地域に根差していくかということの励みになった。関わってくれた多くの方々に深く感謝している。

来年は教育の原点、生活綴方の父と言われる小砂丘忠義の綴人の再演を予定している。

◆質疑応答

Q.牧野富太郎を題材にするというのは、NHKの「らんまん」が決まる前からだったのか。

A.はい。NHKも取り上げてくれて盛り上がったのでありがたい。こんなに立派で、生き方がすごいのに、なぜ牧野富太郎の映像がないのかというのが一番最初の出発で、高知の人間が牧野さんを上演しなくて誰がするのかと、18年前の劇団the・創の創立のときにこの題材を選んだ。

土佐山田・あーとリンク vol.2



「土佐山田・あーとリンク」は、アートを通じた地域活性化を目指し、2021年に実行委員会を発足し、昨年も芸術祭の助成をいただき開催した。内容は香美市立美術館と町内2つのギャラリーを結んだアート企画が中心で、関連企画として「まちじゅうおでかけ図書館」を同時開催し、町を歩いて楽しんでもらおうということを行なった。昨年度は大変好評をいただき、今年度も周囲の期待で少しプレッシャーを感じるところもあったが、香美市立美術館の館長が新たに実行委員会に加わってくださり、美術館とも協力しながら開催することができた。

この企画の核となる3つのアート施設を紹介すると、「かふえ&ぎやらりーぐらんま」は2017年に開館して、月2回のペースで展示・運営を続けており、地域の方の作品発表の場として欠かせない存在となっている。香美市立美術館はテーマ性を持った収蔵作品や、県内の若手作家を紹介する「香美アートアニュアル」など、遠方からもファンを集められる独自の企画力が特徴である。「ギャラリー樹下の舎」は登録有形文化財の建物を使ったギャラリーで、古民家ならではの展示空間が特徴である。

今回も昨年に引き続き、この3会場での展覧会を同時開催した。町を巡ってもらおうアートイベントとして企画し、テーマを「楽しい絵画の世界」とし、美術館では写実絵画作品展、2つのギャラリーではそれぞれ県内作家の石見陽奈氏、それから島村悠氏に参加いただいた。お二方も香美市立美術館の「香美アートアニュアル展」に参加経験のある若手作家である。美術館では主に県内の収蔵作品が中心だったが、見せ方を工夫して写実絵画の世界が垣間見える展示となっていた。「かふえ&ぎやらりーぐらんま」で石見陽奈氏は日本画の展示を行った。そして「ギャラリー樹下の舎」では島村悠氏の段ボールを切り抜いた写実作品を展示した。また10月30日に各ギャラリーでの作家によるトークイベントを行った。町を巡る仕掛けとして、各会場の間を歩いて巡ってもらうことを意識し、まちあるきマップの作成も行った。地域の魅力発信につながるよう、周辺店舗や文化財などの情報も盛り込んだ。また、まちあるきマップの裏面がスタンプラリーの台紙となっており、3会場でスタンプを集めると景品がもらえる。本年は香美市立美術館の協力により、参加作家のポストカードセットを作成することができた。

次に、町内の飲食店にもお声掛けし、あーとリンク開催期間中限定で2つのお店でコラボメニューを提供していただいた。作家さんの作品にちなんだメニューを考案し、カフェモグカミーノでは店内に石見陽奈氏の作品展示を行った。提供するクッキーも近くのお菓子屋さんでコラボすることができた。

それから、今年の会場サインは手作りでも小さなものだったが、今年は助成をいただき、のぼり旗を作れたため、しっかりとアピールすることができたと思う。各会場と駐車場、コラボメニューの店舗の中にも置かせていただいた。

今回新たな取組として、「香美市観光ガイドの会」が行っている、既存のまち歩きツアーをアレンジした、あーとリンク版のまち歩きガイドツアーを行った。町内の文化財とギャラリーを巡るというコースで、集客に苦戦したが、私達も違う団体の活動内容を知ることができ、今後につながる取組になったと思う。

新しい取組の2つ目として、企画趣旨の周知と持続的な運営に向けた取組を兼ねて各会場にて寄附を呼び掛け、300円以上寄附いただいた方にはバッジをプレゼントした。予想以上に多くの方に寄附いただき、今後の励みとなった。

9日間で353名の方に来場いただき、昨年からの参加者も多く、イベントを楽しみにしてくれているということが、また励みになった。アンケートでは、「年2回できないか」や、「子供向けのワークショップがあるといい」や、「もっとたくさんアートを見たい」といった、イベントの拡大を期待した声をいただいたので、来年の開催に向けてまた検討していきたい。

イベントを振り返り、良かった点としては、昨年から継続して行っているまちあるきマップ等企画自体の満足度が高かったことと、昨年の反省を活かしてスタッフやサインが充実できたこと。さらに、まち歩きガイドツアーという新たな連携ができたことである。反省点としては、去年のハードルが高くなってしまったことで、運営が大変になり、開催を決断するのに時間が掛かり、準備期間が少なくなってしまった点。また、今回は前回よりも開催期間を少し短くしたため、その分集客に苦心した。期間の設定や運営体制はまた検討が必要だと思う。今回は、香美市の新図書館の引越しの

時期と重なり、前回やった図書館との連携企画である「まちじゅうおでかけ図書館」ができなかったため、町内の立ち寄りスポットが少し減ってしまい、歩いて回る人が少なかった印象がある。次回はまた図書館とも連携したいと思っている。

次回は2023年秋に同様のアートイベントを予定している。様々な手段があると思うが、周囲の期待を力にできるよう、継続する仕組みを充実させていきたい。

◆質疑応答

Q.収支決算書を見ると、収入のほとんどがKAPの助成金であるが、今後事業を行っていくにあたり、収入の用途はあるのか。

A.今年度も一部、香美市立美術館の予算でポストカードを作ってもらったが、香美市の援助をいただく形と、これから香美市の商工会とも連携ができればいいと思っているので、広告や場所の提供、人的サポートをお願いできればいいと思う。

◆意見

・例えば、他地域のものを山田の中心市街地で展開する等、地場産業と何かを掛けてみるといった違う要素を見せていくのも良いと思う。

しまんと景観デザイン研究所～むこうはどこだ。～

※事業報告会欠席のため、質疑応答及び意見のみ掲載。

◆質疑応答

Q.11月3日の下田自転車ツアーに参加し、下田地区の歴史や文化などが非常に分かりやすく良かった。主催者からイベントの説明があり、ツアーに参加している10名ほどには伝わったが、参加されてない方には、(参加賞を渡すスポットがあつてそこを周るみたいなものがなく)少し分かりにくい感じがした。チラシも、分かりづらかった。この先どんな方針で来年度以降、どんなことを最終的に目指していくのか。

A.今回の取り組みは、企画当初から3～5ヵ年をかけて「文化観光」にまで高めていきたい意向の初年度であったため、運営・広報・開催地区との協力体制などゼロベースから手探りの取り組みとなった。そのため、開催地域(下田地区をふくむ四万十市)において初めての「アート」の共有レベルを高めることに多くの労力を割き、運営メンバーの充足や広報活動等に時間を割けない状況となった。

また運営メンバーが圧倒的に不足した状況であったこともあり、イベント時の効果的な運営が難しい結果となった。イベント内容においても、どんなプログラムが地域や一般客にとって好反応を示すのかわからず総花的・実験的に位置付けざるを得なかった。

今回の取り組みを通じ、地区長はじめ多くの住民や関わった学生、ほか関係者等と「効果」や「課題」を共有し、協力体制も高まってきたので、次回は地元も巻き込んだ開催内容や運営体制を構築していく。

今後数年をかけて、地元の食提供や川やまちを使ったアクティビティの提供など、文化観光コンテンツを段階的に高めていきたい意向で、その意味では運営メンバーとなる若者等が少ない「下田エリア」のみに固執しては立ち行かなくなることが明白で、下田地区の対岸にある「初崎地区等」の「河口域」で活性化チームを組織化するなど、他エリアや他カテゴリとの共創体制を強化していきたいと考えている。

◆意見

・広報の仕方を分かりやすくして、外からも来ていただけるようなきっかけがあればKOCHI ART PROJECTSとしての広がりがあった。また、下田地区を知ってもらおう事にもつながる。

・地元のコーディネートをしなくてはいけないので、色んな人を県外や村外から呼んでくるのは大変だと思う。仲間を増やして、事業を展開していくことができれば良いと思う。

ファインダー越しに見る室戸ユネスコ世界ジオパーク～地域の自然と人の暮らし～



今回開催した写真展の前段階として、フォトコンテストを開催した。定期的にジオパーク推進協議会の主催で実施しているフォトコンテストで、写真展で展示する写真を公募するためのフォトコンテストである。室戸ジオパークのフィージビリティを向上させることを目的とし、今回で7回目を迎えた。そして応募していただいた写真は、営利目的でない限り、私たちのPR媒体に使わせていただくというプロモーション活動の一環でもある。フォトコンテストの写真のテーマを、自然と人の暮らしのつながりが分かる写真で、かつ室戸市内で撮影したものとし、6月から10月上旬まで募集して40点

が集まった。なお、撮影時期は特に指定してない。

また新たに取り入れた企画として、地元の室戸高校生の視点から「僕らが見た室戸ジオパーク」というテーマで撮り下ろした20点の作品をフォトコンテストの写真と合わせて展示した。室戸市内の小・中・高生というのは、ジオパーク学習というものを進めており、ジオパークとは何かということを多角的な視点で学んでいる。その中でキーポイントになるのが、「ジオパークというのは室戸岬のことや岩や海のことではない」という点。多くの方が誤解しているが、「ジオパークというのは私たちの暮らしというのが自然の上に成り立っていて、私たちは自然とともに生きていることを、知ることのできる場所」と子供達には教育の中で伝えている。この企画のために写真作品を撮り下ろしてくれた高校3年生も、そう教わってきたが、「室戸ジオパークが作成するPRポスターや動画は海や岩の写真ばかりで、僕らの普段住んでいる室戸を映し出したものではなく、僕たちの生活が見えていない」という考えがあった。これをきっかけに、私達が企画する写真展と一緒に、高校生の視点から見たジオパークを写真展と一緒に展示することとなったのである。

これまでのフォトコンテストで集まってきた写真は、室戸ジオパークは自然や室戸岬、岩、海といったイメージがやはり強いので、そういった写真がメインを占めており、特に室戸岬の岩や灯台の写真は多く集まっている。最近、文化的な部分も室戸ジオパークのコンセプトの中に含まれるという理解が進んできて、吉良川の御田八幡宮での神祭の様子といった写真も少々見られるようになってきたが、文化的な神事やお祭り等の非日常的な部分を映し出すものが多く、室戸での私達の普段の生活を切り取った写真がなかなか集まらなかった。そのことから、ジオパークの理解は進んでいないと事務局としては残念に思っていた。今までのフォトコンテストでは、自然や景観というテーマを出していたが、今回はそれをやめて、地域の自然と人の暮らしというテーマだけで出すことにした。伝わりづらいのではないかと意見もあったが、今年度は高知県の芸術祭助成事業としても、私たちのノーマルな文化を映し出す作品を集めるため、またいつまでも間違ったジオパークの理解のままではいけないと「～地域の自然と人の暮らし～」というテーマ一本で募集をすることにした。

フォトコンテストの入賞作品の全てに人が写っているというのは今回が初めてのことであった。入賞作品は天然写真家の前田博史先生に選んでいただいているが、日常の風景を切り取ったような作品が多かったのは今年度の特徴だった。これは、写真を撮った人達なりに、自然とつながっているということはどういうことなのかを考えて表現をした結果だろうと思う。明らかにこれまでのフォトコンテストで集まったものとは違う作品が集まったので、伝えたかったメッセージが少しでも伝わったのではないかとと思う。そして、写真展を開催した11月1日から12月10日までの期間、来場者特別賞を用意し、来場者延べ3,100名のうち140名の方から投票があった。

私達が今回のフォトコンテストと写真展を通じて伝えたかったメッセージは、「人は自然によって生かされている」ということ。室戸ユネスコ世界ジオパークのキャッチコピーは「海と陸が出会い、大地が誕生する最前線」である。国際的に価値が高い地質遺産が室戸にはあり、ユネスコ世界ジオパークに認定されているが、私達の祖先が独自の産業と文化、生活を形成し、それを守りながら活動してきたということを、写真展で表現したいと企画した。

課題は、PR力である。作品の集まりが悪く、四国エリアにチラシをまいたり、PR活動をしたり、前田先生とも相談をしながら募集の締切り時期を延ばしたりしたが、応募総数は40点であった。

良かった点は、フォトコンテストに応募をした地元の方から、「写真を撮るために室戸のいろんな場所に行き、レンズを通して新しい室戸の景観や、風景を見ることができ、すごくいい機会になった」と感想をいただいたことである。

◆質疑応答

Q.フォトコンテストの賞品はどういったものがあるか。

A.入賞作品は特にカテゴリ分けせず3作品から5作品ぐらい選ぶが、大賞の方には金一封と地場産品をいつも送っている。去年度は、入賞した作品がオリジナルフレーム切手になるというのを賞品にしてPRしたところ、かなりの数が集まったが、毎回切手を作るとなると訴求力も落ちてくるため、今年はやっていない。

◆意見

- ・ポスターも非常に期待を持たせる出来で、期待値が高かった分、規模や点数が正直寂しかった。室戸高校の生徒が参加したことや、地元の方にとって非常にいい活動だと思うが、他地域や県外からの応募者が増えると良い。
- ・賞金の金額を明示する等、広報の仕方を工夫すると応募数が増えるのではないか。
- ・色々なコンテストの情報が掲載されている登竜門というウェブサイトを広報に利用してみてもどうか。

いしはら音楽祭～紅葉彩る三宝山地福寺コンサート～



いしはらの里音楽祭は、文化芸術に触れる機会が少ない過疎の石原地域を、音楽に触れることで少しでも元気にし、また地域外の人達に参加していただき、少しでも交流人口や関係人口を増やしていくことを目的として開催しており、だんだんと恒例的になった。

コンセプトは気軽に安い入場料でプロの演奏が聴けることで、鈴木琴栄氏や、瀬戸フィル交響楽団等にも来ていただいた。また地域の地福寺を会場とすることで、石原でしかできない体験をしていただける。

2020年に開催した1回目の音楽祭のときは料金が1,000円で、鈴木琴栄氏と瀬戸フィル交響楽団の弦楽四重奏をしていただいた。2回目のときは金管五重奏だった。今回は木管四重奏であった。今回もそうだが、サテライト会場で地域の集会所3か所を結んで同時配信をしたり、その後YouTubeで流したりした。地福寺は、40人ぐらいまでお堂内に入り、境内でも聴ける様にした。料金はお堂内が1,500円、境内が1,000円とした。

収支決算として、会場に45人、サテライト会場に10人、ライブ配信で20人と、合計で75人ほどがコンサートに来て、寄附金と助成金もあり何とか赤字にならず実施できた。

この助成事業で解決したことは、本物の文化芸術に触れる機会ができたことで、地域外の人たちに来ていただいて、少しでも地域の活性化を図ることができたことである。この時期に音楽イベントがあるということが、少しずつ地域内外に浸透してきたと思う。また、地域外からも来ていただき、産品などの販売等で交流の場ができ、石原独自のイベントができていく感じがする。地域のイベントとして、国道沿いで10月末に「よさく市」があるが、今年はコロナで中止になったため、いしはら音楽祭もどうなるかと思っていたが、何とか実施することができた。

今後の課題は、財源を確保することである。入場料を高く設定せずに、たくさんの方に来ていただけたらいいが、そのためには広報やPRも今後しっかりしていかななくてはならない。特にコロナの関係で、やるかやらないかがはっきりしなかったということもあり、そういったことも兼ねて事前に十分PRをしないとイケないと思った。

財源の問題はあるが、来年こそはNHK交響楽団の弦楽四重奏を招聘したいので、過去3回の実績と経験を踏まえて頑張って挑戦しようと思う。

◆質疑応答

Q.KOCHI ART PROJECTSで3回目の採択だが、助成金が収入の多くを占めている。今後、助成金が減額、あるいは無くなったとしても続けていけるか。

A.合同会社いしはらの里という地域で作った会社があり、宿泊やツアーで利用いただいて得た利益を地域に還元する

ということで、大きな金額ではないが、いしはらの里協議会に運営費が入り、それが活動資金源になっている。それでも助成金が全く無くなると、入場料を上げたり、たくさん人を集めたりしないと厳しい。

第三回いっとひょう沈下橋アートプロジェクト



我々、松葉川青年団は30年ぶりに復活し、27歳から53歳までの8人のメンバーで活動している。四万十町に限らず、青年団は数多くあったと思うが、若手が少なくなる等、なかなか催し自体ができず、縮小されたり無くなったりしている状況である。

2019年2020年と一斗俵沈下橋のアートプロジェクトを開催した。1回目は、地元の窪川高校のクリエイティブの学生さんに、幕に絵を描いていただき、夜にブラックライトを当てると、緑になって水面に映りアートになる。2回目の2020年は演劇をやったが、コロナ禍で、感染防止で消毒をしたり間隔

を空けたり、換気をして行った。

今年、2022年11月に「第三回いっとひょう沈下橋アートプロジェクト」を開催した。イベントの内容としては、テントアート、音楽ステージ、プロジェクションマッピング、光のアート、また町内の方に出店いただきホットコーヒーなどを提供していただいた。

2020年のコロナ禍とはまた違って、町内でもコロナ感染者が増え、アーティストや子供達と集まることがなかなか難しく、市内に在住のアーティストともZoomの会議で、どういう内容でイベントをやるか、またどんなワークショップをやるかということ話をした。コロナ禍で、日程調整も難しく、ワークショップに関してはアーティストが撮影したYouTubeを見ながら子供達とテントアートのワークショップを開催した。YouTubeで、アーティストの思いや、イメージを話していただき、子供たちがそれを見て、透明のテントに絵を描いて、マジックで色を塗ってセロハンを切って貼り付けた。

イベント当日は、日中が雨で開催は厳しいかと思われたが、4時ぐらいから天候が回復した。ワークショップで作った作品は、夜に点灯すると、スタンドグラスのような形で映った。今回はアートと地域、農業をテーマにし、稲を刈った後の田んぼを借りてかかしと青葉を立てた。かかしはハウルの動く城に出てくるかかしをモチーフにして作ったそうで、子供達が写真を撮って、SNSで上げていた。また、テントアートを下っていくと沈下橋があり、沈下橋の石垣にプロジェクションマッピングという形で、放映して音楽も流した。大自然の中で、映像と音楽を流すことはなかなか地元ではできなかったが、子供連れて賑わい、当初は1回の予定だったが2回放映した。当日は約200人来場していただき、次もやってほしいという声をたくさんいただいた。

今回のアートイベントはYouTubeで生配信を行い、また過去にやった催しはYouTubeで公開している。2021年はコロナ禍で、アートイベント等もできなかったが、オンラインでよさこい踊りをしたり、地元の小学校の卒業生である福永宇宙君のボクシングの試合を体育館で応援して、宇宙くんからお母さんへの思いを伝えてもらったりというような事もした。他にも、「七五三の獅子を踊る人がいないから、青年団やってくれないか」と依頼があり、YouTubeで勉強しながら、当日行って獅子をやったが、アートイベント以外の自分たちの活動について知っていただけたのではないかなと思う。

◆質疑応答

Q.3回助成したが、自分達でこのイベント続けていくための資金繰りの目途はあるか。

A.本日から3月の中旬ぐらいまで、松葉川温泉でアートイベントが開催されるようになっており、前述したアーティストのかっぱのアートや、今まで作ってきた鉄のアートの販売もしていただけるようになった。また、四万十川松葉川青年団の一人、吉田健一氏がヒノキサウナを考案して、販売をしており、その設置を今回松葉川青年団が行った。松葉川温泉のプロデューサーと青年団にもつながりがあり、温泉と一緒にコラボするといったアートの発展が見えているので、自立してやっていくことを意識して、取組をしていく。

過去から未来へ「南海トラフで芸術は死にますか？」^{アート}



パルコキノシタといい、生まれたのは徳島で、現在は宮城県石巻に住んで芸術活動と復興支援活動をしている。まず、1年前に南海トラフという生命や文化の存亡に関わる重大な案件に対してどういうふうに関わるかというふうにかと考えたときに、まずは四国4県の人たちが協力体制を取るように仲良くなるのが大事ではないかと、芸術の四国遍路展をした。助成金の申請は、県ごとにしかできないことが結構あるが、今回はいろんな人たちの持ち寄りです。徳島、香川、愛媛、高知と回ることができ、高知に関しては4日間予算を取っていただき大変有り難かった。(令和4年2月に芸術の四

国遍路展高知編を高知県文化財団の助成を受けて巡回開催)

宮城県石巻は震災があったときに本当に想定外のことが次々と起こった。具体的には地盤沈下や、道路が浸水して陸の孤島みたいになる等、へりでは物資を送れないような事態。地元の人だったらドライバーに近道を教えることや、救援物資を届けることができる等、コミュニケーションの有無が大きな違いとなる。高知県は南海トラフで大きな被害が出るとシミュレーションで分かっている中で、四国みんなが協力し合うような体制を作ることができたら、そこで多くの命が守れるという僕なりの判断だが、どちらかと言うとそういうのはオルタナティブの民間でこそできるものではないかと、芸術の四国遍路展を組んだ後に「南海トラフで芸術は死にますか？」というお題を立ち上げた。今回は宮城県石巻で活動している芸術家4名(村上タカシ・開発好明・富松篤・平野将麻)と高知県の震災にまつわる作家活動をされているアーティスト(震災以降東北入りをして関連のある作品を県下で発表している大木裕之・西村知巳、大学卒業年度に関東で被災し震災を自身のテーマの一つとする平野史恵、東北高知に共通する神道の伝承切り紙を作品に取り入れている石井葉子)と合同で、ギャラリーファウストで開催した。高知新聞に載ったことをきっかけに多くの人が足を運んでくれ、関心を持っていただけた。美術担当の宮城教育大学の村上タカシ准教授が、実際宮城県で震災を受けて被災した道路標識の現物を持ってきた。私も宮城教育大学の非常勤講師をやっているが、一般社団法人MMIX Labという団体に入っており、そこで国土交通省や仙台市、いろんなところに道路標識回収の申請をして正式にこういったものを審査委員会として保存する、保管する、震災教育に生かすというようなことで、150点ぐらい集めている。ここ10年で東北地方ではこの展示はやり尽くした感があるが、南海トラフのリスクを抱えている高知県の人にはぜひ生で本物を見てもらいたく、今回運んできた。道路標識というのは、もともと錆びにくく、壊れにくいもので、何年も野外に置いておいても絶対壊れないほど頑丈にできているものである。それが紙くずのようにぐしゃぐしゃになるというのを見るだけでも、津波の威力の恐ろしさが伝わるとい、展示をしたが、実際に効果があったと思う。また、石巻は鯨の缶詰で有名なメーカーがあるが、その10m以上もある缶詰が描かれたタンクがぐしゃぐしゃになって道路に転がるショッキングな写真を展示した。

Art nest YOMOでの展示では、MMIX Labに所属しているパルコキノシタや開発好明や富松篤いろんなアーティストたちのこれまでの活動の写真と映像のDVDのほか、新聞記事や広報印刷物、それによって生まれた作品群の展示、並びに、最初は距離をとり懐疑的だった被災地の方々から回を重ねて参加しアーティストとの楽曲制作やスタッフ側となり接触を経て自分の場所として関わる心の復興の側面の記録などの実話を直筆のもの等も交えて展示した。

そしてEquivalentという高知大学のそばにあるアート拠点で、実際に東北、東日本大震災、10年間アートを通じて復興支援に関わった報告と高知からは震災の年平成23年3月16日に運営を開始したことから震災主題の企画を10年行ってきた藁工ミュージアムの学芸スタッフ松本志帆子さんに登壇いただき、zoomを用いてオンラインのリアルタイムで東北のアーティストと会場の高知の人々をつなぐ試みとなった。会場はほぼ満席で大変関心の高い人や、高知大学の教授や高知市議の南海地震等災害対策調査委員会所属の議員の方もいらっしや、ご支援をずっと熱心にされているということで、話し合いが終わった後も、質問が絶えなかった。新聞を見て来たという人が相当数いたので大変良かった。

◆質疑応答

Q.トークイベントの参加費が2,000円だが、これは資料等が付いているためか。

A.はい。村上タカシのおしるこカフェの分と桜プロジェクトの活動記録の冊子付。

◆意見

・非常にセンセーショナルなテーマが付いており、つかみとしては興味をひくと思うので、地域の防災士と一緒に広報をしてもらう等、広報活動にも力を入れると参加が増え、より広がると思う。

PaperAA! ~赤れんが商家を使ったインスタレーションと映像ワークショップ~



企画の発案者協力者としては、いの町のWashi+、コマ撮りアニメのワークショップ等県内で活動している大月町のあにめのいろは、赤れんが商家を土台にしながら伝統的な工法やコミュニティづくりを頑張っている香南市のすてきなまち・赤岡プロジェクト。これら3団体が協力して自分たちの強みを活かして何か一緒にできないかということで、ワークショップとインスタレーションの公開を行った。

まずワークショップについて説明すると、11/26・27の2日間にかけて、お昼を挟んだ長時間、子供達に来ていただき、赤れんが商家について学んでもらったうえで、和紙の素材を

使って自分達の好きなアニメを作るといもの。参加者は親子9組、子供達は12人で最年少は3歳。携帯やiPadを使ってアプリをインストールし、自分の好きな所で好きな物を使い、それを動かしてストーリーを作り、撮ってアニメにしていく。さらに、時間がある子はそれに合わせた音楽もつくって総合演出をしていく。もちろん短時間なので完璧なストーリーにはならなかったが、限られた時間の中で工夫しながら行った。小学校6年生も夢中になって、小さい靴がお茶を入れるストーリーをつくった。赤れんが商家のPR動画が出来ると良いと思っていたが、結果としてはそうではなく、素材や場所、子供達の感性を活かした楽しい作品になったように思う。良かったことはデジタルとリアル融合で、このリアルな物がどうやったらそれらしく動くのか考えながらやっていくのが面白かった点。12/3・4に行われた赤岡の冬の夏祭りに合わせて上映した。

インスタレーションの展示では、赤れんが商家の土間に和紙を使ったペーパーランドというストーリー仕立ての作品の公開もした。これまで鳥取県といの町紙の博物館で公開しており3回目だったが、初めて美術館やギャラリーのような白い壁の小屋を飛び出してペーパーランドを赤れんが商家の土間に作った。それがすごく親和性があり、和紙と赤れんが商家が融合してとてもいい作品になった。丁度赤れんが商家が屋根を下ろして葺き替える作業をしており、アーティストの原啓太が、赤れんが商家の使い古された瓦が和紙のストーリーとすごく合うのではと自分の作品の周りに敷き詰めてマッチした作品ができた。配置としては、お客さんから赤れんが商家を見て、右手の土間に行くとペーパーランドがあり、左手の座敷や2階にはiPadがたくさん置かれていてそこで上映が見られる。

伝統的な和紙を広めていくことがWashi+のコンセプトで、関連事業として、和紙の原料である楮の蒸し剥ぎワークショップを行った。良かった点は、お客さんが上映を見てから楮の蒸し剥ぎに参加をして、我々の作品について語るという時間が設けられたことである。

◆質疑応答

Q.SDGsの観点から、使用後の和紙はリサイクルやリユースはしていますか。

A.ゴミの出ない作品というのが利点で、ペイント等をしなかった和紙は全て煮直して紙にしている。やぶれかぶれになっても、ちぎり絵にしたり張り子にしたり、循環して使うようにしている。

Q.例えば学校教育の中に入っていき等、今回の事業の延長線上にどのようなものがあるのか。

A.アーティストやアートに興味のある人、地域の子供達、全てにアプローチしたいが、作品ややり方によって違う為、同じ事はできなくても、一部を抜粋してやる等。それぞれ、あにめのいろはは大月町で学校と一緒に活動しており、私はいの町でしている。今回の赤岡も、この展示が始まるまで、中学生に来てもらう事を想像していたというのもあった。

第33回高知版画協会展・徳島版画交流展



開催期間は令和4年11月23日～12月11日で、ほぼ同時に徳島でも版画展を行った。徳島の阿波銀プラザの展示会は徳島版画協会の方が主催で展示運営を行ってくれた。さらに同時に徳島市内のギャラリーGRACEさんという所で小作品の合同展も行った。こちらはどちらかという作品を売るための合同作品展だが、高知の作品の値段の付け方と徳島の作品の値段の付け方は少し違うみたいで、徳島は安くしないと売れないというのがあるようで、高知の版画協会の作品を持っていき値段を付けていたら、徳島版画の一番重鎮の人の作品よりもみんな高くなってしまい全然売れなかった。

今回採択していただいた紙の博物館で行われた版画協会展で良かった点は、念願であった他県版画協会との交流展を22年ぶりに復活させることができたこと。何よりもネックな点が、33回目にもなる版画協会展が毎年代わり映えないという点。メンバーが余り変わらないため、内容もそれほど大きく変わらずマンネリ化していたが、他県と交流する機会を作ることで、技術力向上につながり、また他県にしかないような版画技法を取り入れるきっかけになるところが良かったと思う。

苦勞した点は、他県との連携を深めていく中で、意思疎通やコミュニケーションが大変だったこと。また当日は、作品の搬入後にレイアウトや、この作品をどこに展示するかということを決める人間がコロナになり、どうやって展示をするか悩み苦勞した。

さらに、同じときにワークショップを行った。木版リトグラフという珍しい足踏み刷りの技法を、徳島の先生をお呼びし、高知の版画協会及び一般の方を対象に行った。

来場者数は1,000人きっかりという、うそみたいな数字だが、紙の博物館の職員の方がカウントしてくださったので間違いがないと思う。これぐらいの規模の展示会としては、結構な盛況だと思う。

今後の展開としては、全国各地にある和紙の名産地には必ず独自の版画文化というものが存在する。高知も今、版画協会がそこを頑張っていると思うが、どこも高齢化に悩まされているので、他県の和紙の産地の版画協会とも連携を取ることで、さらに帰属していける場所が見いだせるのではないかと。余談だが、今回の展示会をきっかけに若い作家さんが3名新たに入ってくださったので、やったかいがあったと思う。

◆質疑応答

Q.DMIに出品者の氏名を載せていないのはなぜか。

A.意志疎通で苦勞をしたところの一つに、印刷作成時の校正で文字の直しが大変ということがあった。今回出品者数が40名と多く、氏名の間違い等を防ぐため、出品作家の名前は全て省略し、必要最低限の情報だけを載せた。名前も載せてほしかったというクレームが幾つかあり、スピードを採るか、内容の充実を採るかという選択があった。会場でも出品リストを配布した。

Q.県内の作家と徳島の作家の交流というのは、作品展示以外のところでももう少し効果的にできなかったのか。

A.例えば、徳島で主となっている技法をパネルで紹介する等、特色をもっと表現できるような展示会にもできないわけではないが、今回は第一目標が交流の復活だったため、次からの目標にしたいと思う。

第2回「宿毛寄席」in林邸



この事業の目的は、宿毛の林邸という歴史的な建造物を利用して、話芸を通して宿毛の歴史を知ってもらうためである。宿毛地域の元々ある宝は、宿毛の歴史、偉人が多いこと、そして知られていないが、呉服文化があったこと。これは、侍の町だったことが由来しており、宿毛市が愛媛県との県境でもあったことから、防災の意味を込めて侍がたくさんいた。そして、この小さな商店街の中に5軒の呉服屋があり、染物屋もあった。そこからずっと続いてきたもので、今現在50、60歳ぐらいの方の家には、その方のお父さんやお母さん、おばあちゃん、おじいちゃんが持っていた着物がたんすの中にたくさん眠っている。着たいと思っても、それを着る機会もないというところで、ニーズがあるのではないかと考えていた。偉人のお話というのは、歴史館に行って勉強できるといっても、なかなか地域の人は足を運ばない。たくさんすごい人が出ているのに吉田茂ぐらいしか知らない。では、どうしたらお話を聞いてもらえるのかと考え、落語や講談という形にして、エンターテインメントという切り口を持って地域のお話を面白おかしく聞いていただけたら、少し間口が広がるのではないかと考えた。

今回この助成を受けてできたことの一つは、プロの講談師を大阪から呼べたことである。一名は講談師の旭堂南春さん。もう一人の方が落語家の笑福亭笑利さん。講談というのは、史実を伝えるものである。昔は新聞、文字を読めない人がたくさんいた。それを講釈、翻訳して文字を読めない人に集まってもらい伝えたことが講談の始まりである。一方、落語はちょっと面白くお話しをするもので、どちらも史実を基に話すということで、プロの方に来てもらった。そして、林有造から3代続けて大臣を輩出したまちのえき林邸を使うことによって、この歴史のこととグループトークを引付けていくことをした。

もう一つは、地域の高校生の協力を得て、SNS映えるフォトスポットをつくった。宿毛高校の地域貢献部の皆さんに考えてもらい、野点傘を立てて、そこで座って写真が撮れるスポットができた。そして、濱中伸也さんという去年土佐の匠に選ばれた組子細工の大工の協力を受けて、窓ガラスから見える民家を隠すため、背面に組子細工を置いた。そしてチラシやポスターを作ったりチケットを作ったりすることもできた。そして、最後に着物を着る機会を皆さんにあげたかったので、着物を着て来てくれたら粗品をプレゼントしますということもした。

今回の良かった点は、私たちスタッフは偉人のことや歴史のことは町の宝だと思っているので、これを活かせる場所ができていたということに、本当に前向きに意欲を持って取り組めたこと。そして地域の高校生に協力してもらうことで、まちおこしや地域活性化について学んでもらうことができたのではないと思う。また自分たちはチラシをあまり刷れなかったが、宿毛市が広報誌の背面一面にカラーで掲載し地域に配って協力してくれた。

会場の設営では、実行委員の中に本場の落語を見たことのある者がおらず、それでも見様見まねで会場を作ったが、会場とはなし家が一体になるためには、ステージは高いほうがいいと落語家さんに教えてもらった。でも林邸自体の天井が低いから、当日は前半と後半とでステージの高さを15cmぐらい変えた。また、座布団席を前に置いていたが、人が座らないなら取ってしまっ前に出したほうがいい等いろいろアドバイスをいただいた。

お客様からのアンケートを見ると、「知らなかったことを知れて良かった」や、「宿毛にこんな人がいて良かった」、「着物を着られて良かった」と、私たちが狙っていることとお客様から返ってきた答えが一緒だったので、宿毛寄席をやった良かったと思う。

林邸は100人ぐらい宴会で使っていたと聞いているが、コロナで畳1畳につき一人という制限があり、チケット代だけでペイできることはなく、助成金に助けられた。しかし、どこかの段階でこの人数制限が宿毛市から解除になっており、その情報が入って来なかった。もしそれが分かっていたら、もう少しお客さんが呼べた後から悔やんだ。

将来的に、この宿毛寄席自体は自分たちだけで、町で動かして継続していけたらいいと思っている。そのためには、毎回プロの方を遠くから呼んでくるというのは金銭的に厳しいため、地域で話せる人を育てていかないといけないので、実は学生講談も最初のプログラムには入れていた。ただそれはプロの方に、発表会ではないので、素人さんと一緒に舞台で立つことはできませんと断られてしまった。そういうプロの方との認識の違いがあり、その育成の部分は今後の

課題である。

そして、講師、落語家のファンの方がオンラインでこれを見てくださる可能性があると思い、オンラインチケットを販売した。しかし、実行委員会のスタッフでSNSをやっている人が3人しかおらず、拡散が思ったほどできなかった。プロの方も自分のページで1回ずつは出してくださったが、響きが薄く上手いかなかった。

プロの方が本当の寄席に出られるときは、出番はある程度決まっておき、噺の内容は順番にネタ帳に書いていくので、前の方がどんなネタをしたのかとか、どういう笑いを取っていったのかで、自分のお話を決めていられる。今回、落語家さんは1席(1話)、講師さんは1席(2話)と決まっていたが、急遽、当日開演前に講師さんが2席(2話)へ変更になった。話が長くなるので2つに分けることとなった。そうなったときに、トリは誰が取るのか、中入りはどこで入れるのかというのが、こんがらがってしまった。例えばインカムがあればスタッフに指示ができると思ったが、ないので私が裏口から表口まで、走ったり抜いたりしながら伝えていったことがあった。

そして、常時会に参加できる実行委員が6人しかおらず、特にコロナやインフルエンザの時期は、感染していたりしたら会は開けないので何とかしたい。平均年齢が微妙に高く60代くらいなので、若い人を入れていく必要があると思う。なおかつ、前日のセッティングはアルバイトに入ってもらったが、デジタルの面でマイクの調整一つとっても分かる人がいないことや、オンラインに関しても今回は何とかやってみたが、やはり分からないことや難しいこともあるので改善したい。

最後に、小学生2名がせっかく来てくださっていたが、話し言葉が違い理解できなかったためか、始めて15分ぐらいで外に遊びに行ってしまったので、子供さんが分かるような簡単なお話も組み込むといいと思った。

◆質疑応答

Q.プロの方が素人と一緒に舞台に立つことはできないということだったが、今後の方針は。

A.プロの方を呼ぶ意味は認知だと思っています。まずは宿毛市の方、幡多郡内の方に、宿毛で寄席をやっているというのを知ってもらい、その後、大学生の落研等に協力をお願いし、地域の学生や、お話が好きな方等をオファーしていつて実行委員会や地域で運営していくことを最終的に目指している。

晴れる夜に誰かの寝息が聞こえるOne of the bear shooters in the world



劇団coyoteというのは札幌を拠点に10年ほど活動をしてきたが、昨年の4月に主宰である私、亀井健が高知に移住して今回の作品を高知で発表することになった。高知に移住した理由は、土をいじりながら創作をしたいと考えたわけだが、土をいじっているうちに早く創作をしたくなり、ホームページなどを探していると、この助成金を見付け、何かできそうだなと思い申請してみた次第であった。

今回の作品は、もともと高知に移住した僕と東京にいる見谷聡一というパーカッションをやっている男が、高知で移住した僕と何か一緒にやりたいということになり、考えて本を書いていたが、そしたら友人が高知におり、矢野絢子と嶋崎史香と一緒に手伝ってくれるということになり、作品を発表することができた。

札幌は演劇が最近非常に盛り上がり、気軽にお客さんが集まったりするため僕は半分慢心していて、高知でもそんなに苦労しないのではないかと考えていたが、集客は大変苦労をした。僕がまだ高知に住んでから1年も経っていないというのもあると思うが。目標は物すごい人数で考えていたが、メフィストフェレスで2回公演を行い、有料無料を含め66名を動員し今回の事業を終了した。お客さんの反応は非常に好意的で有り難かったが、何分アンケートをとるといこともあまり考えてなかったもので、ツイッターやその後連絡をいただいて感想をいただくことになった。

この助成を受け、本当に僕は高知で何のつてもなかったのが本当に救われたが、ゲストが東京の人間だったりミュージシャンだったり、コロナがまた過激になってきたりとかもしていたので配信が必要ということで、配信や機材の手配に関しては非常にスムーズに行えたので有り難かった。そして高知で芸術を表現するというのが、この事業に参加させ

ていただいてやっと感じが掴めたような状況ではある。札幌は、演劇が盛んになるまで30年ほど掛かった。30年前、本当にお客さんと呼ぶのは大変で、宣伝するのも非常に大変だったが、北海道文化財団が舞台塾を企画し、その後北海道演劇財団で演劇シーズンというのが始まり、それでどんどんマスコミ、メディアに働きかけるようになり、お客さんが集まるようになった。そのうち札幌国際芸術祭というのが始まり、そこでも演劇が発表されることもあり、だんだん札幌の人は芸術文化に触れやすくなっていったと思う。高知の文化が僕にはまだ全然分からないが、また芸術祭に参加してみたいと思っている。もっと触れやすくと、僕の気持ちの中では盛り上がりつつあるが、どうなのかはこれから考える。

反省としては高知の地元の方とミュージシャンとしか今のところ交流がなく、もっと演劇の方とか絵を描く方とかと交流したい。絵の方は一人仲良くなった方もいるが、これから僕自身も高知の芸術にもっと触れなければいけないと思っている。本当に今回のプロジェクトは僕にとっては始まりで、これから一体何ができるのかというのを考えたい。ただ、札幌に劇団員のメンバーは残っていて、今回のこの作品も今度札幌の交流事業で公演する予定で、今その準備をしており、今年の8月くらいには行えると思う。札幌と高知をもう少しつなげるきっかけになればいいと考えている。そして、僕らはもともと札幌の劇団だが、高知発の高知の劇団として札幌に戻るという形を取ろうと思っている。僕はもう少し高知に染まりたいと思っているが、そういう活動もできそうなので、もっといろんな広がりを作りたいと思っている。友人の矢野絢子も全国を旅しながらライブをするので、その広がりのおかげになればいいと思う。令和元年にも一度、矢野絢子と一緒に高知県で主宰をしたが、そのときもお客さんが少なかったため、どうにかそこを突破していきたい。また、子供が土佐自由学園に通っているが、そこつながって何かできないかということも考えている。それともう少し一般の人が触れやすくといいという思いもある。

◆質疑応答

Q.今回は、狭いスペースで一人芝居と音楽が繊細に心と耳に入ってきたが、今後活動していくときにどういう展開になるのか。

A.今回のメフィストフェレスに関しては、酒場でやるイメージがあり、演劇だけだとバンドみたいにする考えがあった。札幌で大きなスペースで何度かやったときには、舞台を二つ作って、お芝居とバンドでステージを分けてやった。大きな場所のときはバンドじゃなくて合奏的な感じに考えるかもしれない。

Q.高知での組織というのをどうしていくのか。また現状どうなのか。

A.現状は今僕一人ということで、一緒にやろうと言ってくれている矢野絢子というミュージシャンが高知にいる。また劇団員を募集しようと思っている。制作の人間がいてほしいので、僕が今まで経験してきたスキルを伝えられる制作に向いた方を探そうと思う。

◆意見

・もっと多くの方に聞いてもらいたいので、音がよく響く県立美術館ホールを試してみてもどうか。矢野絢子氏、嶋崎史香氏、パーカッションの方もすごく広がりのある音を持っているので、マイクを使わなくても十分にいい形で表現ができると思う。

第51回高知県文芸賞

募集要項

募集部門

短編小説(1人1編)／詩(1人1編)／短歌(1人3首以内)
俳句(1人5句以内)／川柳(1人5句以内)
*()内は応募できる作品数

作品送付先

※郵送のみ・メール不可
〒781-8123 高知市高須 353-2
(公財) 高知県文化財団内
「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

締切日

令和4年9月30日(金) 当日必着

応募条件

未発表作品であること。応募者は高知県在住者に限ります。
*私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。
*入選作品集等に入選作品を掲載することについて許可をいただくことを条件とします。
*その他、上記の条件等に則り、事務局が判断する場合がありますのでご了承ください。

作品への記載事項

①部門名 ②氏名(フリガナ)※ペンネームご使用の場合は併記 ③住所 ④電話番号 ⑤年齢を必ず明記してください。
*記載場所等は部門ごとに異なります。(下記表参照)
*鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはっきり書いてください。

部門ごとの注意事項

部門	記載方法・注意事項
短編小説	<ul style="list-style-type: none"> ■作品本文は400字詰原稿用紙10枚。 ■パソコンの場合、20字×20行で設定してください。 ■必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。 ・1枚目：タイトルを明記 ・2枚目～11枚目：作品本文 ・12枚目：部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記
詩	<ul style="list-style-type: none"> ■作品本編は400字詰原稿用紙2枚、37行以内。 ・1枚目：1行目上方に部門、作品名、2行目下方に氏名を明記。(3行目はあけて)4行目から作品本文を書き始めてください。 ・3枚目：住所・電話番号・年齢を明記。
短歌・俳句・川柳	<ul style="list-style-type: none"> ■通常はがきを使用してください。 *学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。 ■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。 ・はがき表面に部門名を必ず記入してください。 ・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

賞

「高知県文芸賞」(各部門1名)
「高知県文芸奨励賞」(短編小説部門2名、他部門5名)
表彰状と副賞が授与されます。
その他、佳作が選出される場合もあります。

応募の注意事項

類似(類想)作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害(経費)については応募者に負担していただきます。

応募状況と入選者数

	応募総数	応募人数	文芸賞	文芸奨励賞	佳作
短編小説	28編	28人	1	2	1
詩	46編	46人	1	5	5
短歌	354首	169人	1	5	6
俳句	833句	321人	1	5	10
川柳	563句	128人	1	4	10
合計	1,824作品	692人	5	21	32

表彰式

開催日: 令和4年12月11日(日)

会場: 高知県立文学館ホール ※表彰式への出席は、文芸賞・文芸奨励賞受賞者

副賞

文芸賞 表彰状、図書カード、深海のペン立て(内原野陶芸館・ガラス工房/安芸市)、土佐茶詰め合わせ(若草園/高知市)

文芸奨励賞 表彰状、図書カード、土佐茶詰め合わせ(若草園/高知市)

佳作 表彰状、図書カード



文芸賞審査員

短編小説	杉本 雅史	詩	小松 弘愛	短歌	梶田 順子
	米沢 朝子		林 嗣夫		中野 百世
	若江 克己		やまもとさいみ		山脇 志津
俳句	植田 紀子	川柳	小笠原 望	※五十音順、敬称略	
	橋田 憲明		清水かおり		
	味元 昭次		西村 信子		

発表について

①入選者名は11月上旬に、高知県芸術祭公式ホームページ上で発表予定です。
②入選作品は「高知県文芸賞入選作品集」(12月中旬発行予定)、高知県芸術祭公式ホームページ等に掲載します。
③文芸賞および文芸奨励賞受賞者の方は、表彰式において表彰状と副賞が授与されます。佳作受賞者には表彰状が授与されます(郵送予定)。
《表彰式: 12月11日(日) 高知県立文学館ホールにて開催(予定)》

くわしい情報については
高知県芸術祭 で検索!



高知県芸術祭
公式ホームページ

第51回高知県文芸賞受賞者一覧

部門	賞	住所(児童または生徒等の場合学校名及び学年)	氏名またはペンネーム(ふりがな)	題名(ただし、短歌、俳句、川柳は作品)
短編小説	文芸賞	高岡郡佐川町	片岡 裕 <small>(かたおか ひろし)</small>	キス
	文芸奨励賞	高知市	久尾さとな <small>(ひさお さとな)</small>	パキラ漫筆
		香南市	内山真知子 <small>(うちやま まちこ)</small>	伯父さんの遺言
佳作	土佐高等学校一年	網野日奈子 <small>(あみの ひなこ)</small>	夕暮れに雨	
詩	文芸賞	香南市	飯島 敦子 <small>(いひじま あつこ)</small>	たからもの
	文芸奨励賞	高知市	都築 悦子 <small>(つづき えつこ)</small>	髪
		香南市	町猫 <small>(まちねこ)</small>	痛み
		高知市	甫木 恵美 <small>(ほき えみ)</small>	彼岸
		土佐市	石川 志津 <small>(いしかわ しづ)</small>	幼言葉
		高岡郡中土佐町	田中 福三 <small>(たなか ふくみ)</small>	有るが儘
	佳作	高岡郡四万十町	齋藤 誠司 <small>(さいとう せいじ)</small>	遺産
		高岡郡佐川町	和田 由香 <small>(わだ ゆか)</small>	風まかせ
		安芸郡芸西村	仙頭 祥子 <small>(せんとう さちこ)</small>	探し物
		高岡郡梶原町	吉門あや子 <small>(よしかど あやこ)</small>	幸せ
		高岡郡佐川町	横川 実央 <small>(よこがわ みちお)</small>	デジタル社会を超えて
	短歌	文芸賞	高知市	岡松 榎子 <small>(おかまつ のりこ)</small>
文芸奨励賞		土佐市	池田 育子 <small>(いけだ いくこ)</small>	張り替えもこれで最後と真夏日に夫と見上げるハウスの眩し
		高知市	松本 彩音 <small>(まつもと あやね)</small>	もうちょっともうちょっとだよ母と子の会話やわらか午後の電車で
		高知市	大野 充彦 <small>(おの みつひこ)</small>	走ってはならぬ廊下を思い切り君と走った廃校の夜
		清和女子高等学校二年	高橋 晴香 <small>(たかはし はるか)</small>	夕方に涼しい風と蟬の声家族で囲む小さな七輪
		香南市	内山真知子 <small>(うちやま まちこ)</small>	トルストイの国に戻れと祈る夏に向かいてひまわり開く
佳作		高知市	池崎さつき <small>(いけざき さつき)</small>	砂糖入り玉子はいつも焦げていた私を育てた父の手料理
		高知大学教育学部附属中学校一年	阿部 彩羽 <small>(あべ いろは)</small>	恋なんかしたくないのにその笑顔そのやさしさに恋してしまう
		安芸郡北川村	浜渦 静子 <small>(はまうず しずこ)</small>	運搬車に袖子積み子を積み若者はお先と言ひ山を下りゆく
		土佐市立高岡第一小学校六年	松本 征慈 <small>(まつもと せいじ)</small>	梅雨の日にかがみがわりの水たまり登校中のぬぐせ直しに
		香南市立赤岡中学校二年	松下 優綺 <small>(まつした ゆき)</small>	運動会の日勝負で負けた帰り道母さんが迎えに来てくれた
安田町立安田中学校一年		豊田 涼 <small>(とよた りょう)</small>	内容が何も頭に入らないだから社会は好きになれない	
俳句	文芸賞	土佐市	森田 健司 <small>(もりた けんじ)</small>	戦場につづく空から小鳥来る
	文芸奨励賞	室戸市	山本 千秋 <small>(やまもと ちあき)</small>	生徒から世渡りまなぶ夜学かな
		高岡郡四万十町	藤原佳代子 <small>(ふじはら かよこ)</small>	土佐打ちの鉦振り下ろす山始
		高知市	古田 彩香 <small>(ふるた さいか)</small>	蠅叩第三の手のように在る
		高岡郡四万十町	熊谷 敏郎 <small>(くまがい としろう)</small>	差別なき世へひたすらに代を掻く
		高知市立春野中学校二年	中嶋 俐人 <small>(なかじま りひと)</small>	樹を変えて蝉新しき声を出す
	佳作	南国市	山崎 光子 <small>(やまざき みつこ)</small>	ボンネットバス来る岬卯波たつ
		高知市	木俣 奈美 <small>(きだわら なみ)</small>	母のまた小さくなりし原爆忌
		高知市	山本 敏子 <small>(やまもと としこ)</small>	わたくしを鳥にせよとて荻の声
		四万十市	安西 佐和 <small>(あんざい さわ)</small>	霧曳いて今日の終ひの石蓴舟
		高岡郡佐川町	茨木 毅 <small>(いばらぎ つよし)</small>	ががんぼの毀れやすきは神の齟齬
		高知市	松村 知香 <small>(まつむら ちか)</small>	我が町の風土記繙く夏燕
高知市		川戸 右京 <small>(かわと うきょう)</small>	十三夜母がとなりにおるやうな	
川柳	文芸賞	高知市	渡辺 俱康 <small>(わたなべ ともやす)</small>	知らぬ間に根っ子が枯れていた平和
	文芸奨励賞	吾川郡いの町	森乃 鈴 <small>(もり の りん)</small>	缶切りが無くて平和が取り出せぬ
		高知市	富士田三郎 <small>(ふじた さぶろう)</small>	虫喰いの記憶を埋めに行く素足
		吾川郡いの町	池上佳代子 <small>(いけがうえ かよこ)</small>	お月様私はどんな子でしたか
		南国市	垣内 のぶ <small>(かきうち のぶ)</small>	ひと粒のしずく大河を制覇する
佳作	土佐市立高岡第一小学校六年	寺田 柚月 <small>(てらた ゆずき)</small>	火の玉がもうすぐ落ちる手の花火	
	高知市	立花 末美 <small>(たちばな すえみ)</small>	天の川引き返すには遠すぎる	
	吾川郡いの町	岡林 裕子 <small>(おかばやし ひろこ)</small>	イマジンで地球をすっぽり包みこむ	
	高知市	大野 早苗 <small>(おのの さなえ)</small>	空っぽの微笑みだけにある真理	
	高岡郡日高村	森下 菊 <small>(もりした きく)</small>	恐竜の絶滅は春こんな日か	
	高知市	竹内千恵子 <small>(たけうち ちえこ)</small>	戦いのたえぬ地球へ塩をまく	
	高岡郡四万十町	熊谷 敏郎 <small>(くまがい としろう)</small>	戦場のペンフレンドを待つ結露	
	高知市	小野山征男 <small>(おのやま せいお)</small>	アンパンマンばいきんまんと生きてゆく	
土佐市立高岡第一小学校六年	西村 秋葉 <small>(にしむら あきは)</small>	行ってみる一歩ずつとにげる水		
高知市立春野中学校二年	元吉 璃桜 <small>(もとよし りお)</small>	暑い夜空に絵の具がとびちった		

プレイベント
「土佐女子中学高等学校書道部パフォーマンス」

開催日: 令和4年8月28日(日)
会場: 高知市帯屋町商店街1丁目
出演: 土佐女子中学高等学校書道部、石川梨沙(司会)
入場者数: 158人



芸術祭のPRを目的とし、プレイベントとして土佐女子中学高等学校書道部の中学2年から高校2年までの12人の生徒による書道パフォーマンスを開催しました。

中学生は音楽に合わせた元気な踊りで書を書きあげ、「初めての中学生だけのパフォーマンスで分からないことがたくさんあるけど、今日パフォーマンスを披露することができ、とても嬉しいです。」と話していました。高校生には、オープンイベントのPRも兼ねて、ザ・レヴ・サクソフォーン・クワルテットが演奏するクラシックとジャズの2曲に合わせたパフォーマンスを披露いただき、司会者に出来上がった作品の感想を聞かれると、「みんなで協力して、一生懸命練習してきたので、いい作品ができたと思います。」と、部長の井上さんは答えました。

中学生は「芸術と共に」、高校生は「芸術の彩を咲かせる」など、「芸術祭」をテーマに生徒たちが考えた言葉を書き上げ、会場を訪れた人々から大きな拍手が送られました。両作品は9月1日から約2か月間、帯屋町アーケードに掲げました。



オープニングイベント

ザ・レヴ・サクソフォン・クワルテット

「The Rev Saxophone Quartet」

開催日：令和4年9月27日(火)

会場：高知県立美術館ホール

出演：The Rev Saxophone Quartet

上野耕平(ソプラノ・サクソフォン)、宮越悠貴(アルト・サクソフォン)、都築惇(テナー・サクソフォン)、田中奏一朗(バリトン・サクソフォン)

入場者数：358人

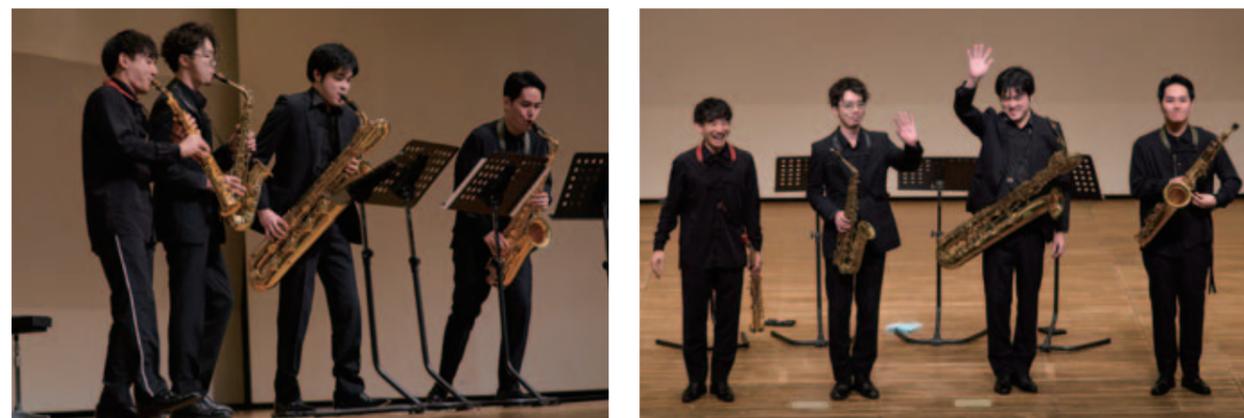


ザ・レヴ・サクソフォン・クワルテット

東京藝術大学出身のサクソフォン奏者4人組「The Rev Saxophone Quartet」のコンサートを開催しました。メンバーの一人である都築惇氏は香南市出身、高知丸の内高等学校音楽科の卒業生で本県に所縁のある方です。

チケットは完売をし、客席には中高生の姿が多く見られました。4人がガリサイタル等で地方に行く際には、吹奏楽を学ぶ学生や団体・個人に演奏指導等のアウトリーチ活動も積極的に行っているとのことで、中高生にもファンが多い様です。

曲目は、バッハ「G線上のアリア」、シューベルト「魔王」などのクラシックだけでなく、ロックバンドのQueenの曲やアンコールでは「見上げてごらん夜の星を」と幅広いジャンルを多彩な音色で演奏しました。会場からは歓声や拍手が送られ、盛況のうちに幕を閉じました。アンケートでも再演を希望する声が多く寄せられています。



本公演の入場料収益は全額「高知ウクライナ友の会」に寄付しました。主に県内のウクライナ避難民を支援するために活用させていただきます。なお、高知ウクライナ友の会は透明性確保のため、事務局を特定非営利活動法人BRIDGEに置き活動を行っています。

メインイベント

第30回中四国文化の集い「郷土芸能の集いin高知」

開催日：令和4年10月10日(月・祝)

会場：高知県立県民文化ホール・グリーンホール

演目/出演団体：「竹田の子守歌」/三味之刻(高知県)、阿波木偶「三番叟まわし」「箱廻し」/阿波木偶箱まわし保存会(徳島県)、しゃんしゃん傘踊り「きなんせ節」「平成鳥取音頭」「しゃんしゃんしゃんぐりら」/百花繚蘭(鳥取県)、島根の民謡「安来節」/佐田町民謡連合会(島根県)、和太鼓「那岐おろし」「金太郎囃子」「ひらいた変奏曲」/勝央金時太鼓保存会(岡山県)、岡田おどり/岡田おどり保存会(香川県)、山北棒踊り「二十人棒」「小棒」/山北棒踊り青年団(高知県)、邦楽「音きらら」/ことNEWあんさんぶる(広島県)、創作歌舞伎舞踊「伊予八百八狸」/九谷地区伊予八百八狸保存会(愛媛県)、市野々神踊り/市野々神踊り保存会(高知県)※出演順

来場者：377人



30回目を迎えた中四国文化の集いは、中四国9県の文化交流により、文化活動の発表機会の拡充と文化意識の一層の高揚を図ることと、圏域の歴史と風土から生まれた郷土芸能の継承・保存・振興を図り、地域文化の交流を促進することを目的として、平成4年度から各県持ち回りで開催しています。新型コロナウイルス感染症の影響で昨年度は中止になりましたが、今年度は山口県を除く各県より10団体が集まり「郷土芸能の集いin高知」を開催することができました。

テーマは「新しい時代につなげる地域の文化芸術」で、伝統ある芸能を各団体に披露いただきました。小さなお子様や若い方も多く出演されており、郷土芸能の将来に明るさを覚えました。出演団体紹介では、演目の起源や歴史、団体の活動内容や各県の魅力についてなどをお伝えいただき、より身近に郷土芸能を感じることができました。





「図工と音楽会inむろと廃校水族館」

開催日：令和4年11月13日(日)
 会場：椎名集落活動センター・多目的ホール
 出演：弘浦 和(イラストレーター)、土佐の犬と愉快的仲間たち
 協力：TC Entertainment、むろと廃校水族館
 入場者数：100人

むろと廃校水族館の駐車場での屋外イベントを企画していましたが、雨天のため同敷地内にある椎名集落活動センターの多目的ホールにて開催しました。一時は停電となるほどの悪天候でしたが、むろと廃校水族館と国立室戸青少年自然の家との調印式やウミガメの赤ちゃんとのふれあい体験など、他のイベントと重なったこともあり、多くの方に足を運んでいただきました。工作ワークショップ「僕らの水族館をつくろう」では、参加者が作った海の生き物たちで写真スポットを作りました。「ミニコンサート」では、幅広い年代に向け、海をテーマにした曲を演奏いただきました。どちらも、親子連れを中心に賑わいました。

僕らの水族館をつくろう
 ●11:00~12:00/13:30~14:00
 ●雨天時はペンキを使って壁に絵を描きます♪よごれてもいい、服装は水着でOKです。
 ●12:30~13:00/14:30~15:00
 出演：土佐の犬と愉快的仲間たち
 土佐の犬と愉快的仲間たち、パンダロンの歌のお見送り、お母さんへメッセージ
 高知県芸術祭実行委員会事務局(高知県文化財団内)
 TEL: 088-886-8013 (平日9:00~17:00)
 詳細については、芸術祭公式HPをご覧ください
 高知県文化財団 高知文化センター 高知市東区南町1-1-1
 高知市東区南町1-1-1 高知文化センター 高知市東区南町1-1-1



◎共催行事

※記載内容は原則として事業実施報告書の記載に則しています。
 ※開催日（部門別）の順に掲載しています。 ※参加者数は、芸術祭会期中内での集計となります。

部門名	行事名	主催団体	日程
演劇	ミュージカル「クリスマス・キャロル」	高知県立県民文化ホール	令和4年12月1日(木)
美術	シャガールコレクション展 死せる魂②	高知県立美術館	令和4年8月9日(火)～10月26日(水)
	石元泰博・コレクション展「水と人のながれ」	高知県立美術館	令和4年9月22日(木)～ 令和5年2月5日(日)
	企画展 「武吉孝夫写真展 一高知県の山村を歩く一」	高知県立歴史民俗資料館	令和4年10月7日(金)～12月4日(日)
	ARTIST FOCUS #03 角田和夫 土佐深夜日記—うつせみ	高知県立美術館	令和4年10月29日(土)～ 令和5年1月9日(月・祝)
	シャガールコレクション展 死せる魂③	高知県立美術館	令和4年11月3日(木・祝)～ 12月11日(日)
	合田佐和子展 帰る途もつもりもない	高知県立美術館	令和4年11月3日(木・祝)～ 令和5年1月15日(日)
映画	県文シネマ日和 月あかり 活弁×生演奏×トーク 無声映画上映会	高知県立県民文化ホール、 シネマ四国	令和4年10月13日(木)
	ライブ演奏付き無声映画&秋の定期上映会 「合田佐和子が描いた銀幕のスターたち」	高知県立美術館	令和4年11月17日(木)～11月20日(日)
文芸	寺田寅彦「茶わんの湯」100年 ふしぎいろいろ展	高知県立文学館	令和4年9月17日(土)～11月20日(日)
	第25回児童生徒文学作品朗読コンクール 県審査及び記念講演会	高知県立文学館	令和4年11月13日(日)
総合文化	企画展「龍馬が七歳だったころ —天保期の土佐の社会とくらし—」	高知県立坂本龍馬記念館	令和4年7月9日(土)～10月19日(水)
	企画展「没後150年 山内容堂 ～鯨海酔侯の見た幕末維新～」	高知県立高知城歴史博物館	令和4年9月17日(土)～12月11日(日)

会場	参加者数(人)	行事内容と成果等
高知県立県民文化ホール・ オレンジホール	400	名作ミュージカルを大人から子どもまで幅広い年齢層が楽しんだ。開場時にホールロビーで高知ジュニアオーケストラによるウェルカムコンサートを開催。クリスマスにちなんだ名曲を演奏し、多くのお客様が足を止めて演奏に聴き入った。
高知県立美術館	2,392	『死せる魂』の挿絵として制作されたシャガールの銅版画を展示した。パネルで話のあらすじを説明することで、描かれた登場人物の性格や場面の意味を考えながら鑑賞してもらうことができた。
高知県立美術館	2,708	写真集『刻』より、目黒川の水面を写した〈水〉と、東京の雑踏を写した〈人のながれ〉のシリーズを展示することで、石元の死生観を反映した晩年の作品の魅力を紹介することができた。
高知県立歴史民俗資料館・ 1階企画展示室	3,565	記録写真を撮り続けている四万十町在住の写真家・武吉孝夫氏が、平成19年(2007)～21年(2009)に高知県の山村を取材した白黒写真170枚を展示し、山村の暮らしや記録写真に関心をもってもらうことができた。あわせて、武吉氏の他の取り組みである四万十川の地名調査や高知市の写真記録などを一部紹介し、好評を博した。
高知県立美術館	2,418	高知ゆかりの同時代作家を紹介するシリーズ第3弾として、南国市在住の写真家・角田和夫氏の個展を開催した。高知を被写体に赤外線フィルムで撮影したシリーズを展示し、その魅力を広く紹介することができた。
高知県立美術館	2,048	シャガールがゴッホ作の小説『死せる魂』のために制作した挿絵を3期に分けて展示。シャガール初の本格的な物語版画における生き生きとした描写を楽しんでいただけた。
高知県立美術館	3,046	高知出身の作家・合田佐和子没後初の大規模回顧展。オブジェ、絵画、写真等の作品だけでなく、資料を含め300点以上を展示した。初期から晩年までの作品・資料を体系的に検証することで作家の全貌に迫った。
高知県立県民文化ホール・ グリーンホール	68	日本独自の文化である「活弁」を生演奏付きの本格的なスタイルで披露し、通常の映画上映会とは異なる劇場体験をしていただく機会を提供できました。小さなお子様から高齢の方まで、どんどん惹き込まれていく様子から「活弁」の魅力と力を実感しました。
高知県立美術館ホール	419	合田佐和子展の関連企画として、サクソ、ヴァイオリン、ピアノ、ドラム等によるライブ演奏付き無声映画公演と、有声映画上映を4日間に渡り開催した。展覧会とあわせて鑑賞された方も多く、相乗効果が得られた。
高知県立文学館・ 2階企画展示室	1,568	寺田寅彦の科学随筆「茶わんの湯」発表から100年を記念し、科学随筆を紹介する企画展を開催。新資料の展示、朗読・作品紹介の映像作成、科学者を招いてのイベントなどを行い、寅彦の随筆の魅力を感じていただいた。
高知県立文学館・1階ホール	91	県審査には、地区審査を経て選出された21名の児童生徒が出場し、実力を出し切った素晴らしい朗読を届けてくれました。また、特別審査委員の田島征彦先生による記念講演会は、残念ながら中止となりました。
高知県立坂本龍馬記念館	32,570	坂本龍馬が7歳だった天保12(1841)年、龍馬をとりまく当時の土佐や日本、世界はどのような様子だったか。当時の祭礼を描いた絵巻や当時の人々の生活を想像させるような生活用具を展示し、約180年前の土佐を紹介した。当時の1日の生活やライフサイクルなどもパネルで詳しく紹介し、「当時の生活の様子がよくわかった」という感想もあった。
高知県立高知城歴史博物館	14,597	15代土佐藩主山内豊信(号容堂)の没後150年を記念して、県内外から集めた容堂自筆の漢詩や手紙、幕末の日本を動かした政治資料など約100点を展示し、彼の事蹟と生きた時代を振り返ることができた。

部門名	行事名	主催団体	日程
総合文化	企画展「発掘された中世の土佐」	高知県立埋蔵文化財センター	令和4年10月9日(日)～ 令和5年3月31日(金)
	古代ものづくり体験教室 (ガラス勾玉づくり、土器づくり)	高知県立埋蔵文化財センター	ガラス勾玉づくり: 令和4年10月10日(月・祝) 土器づくり:令和4年12月18日(日)
	Bunkazaidan子どもクラブ2022 「ピカピカ光るパーティ帽子を作ろう」	(公財)高知県文化財団	令和4年10月15日(土)
	連続講演会 「武士の時代を考える—その制度・精神・象徴」 第3回「城下町萩と武士の暮らし」	高知県立坂本龍馬記念館	令和4年10月29日(土)
	企画展 「龍馬最後の帰郷—坂本家と川島家・中城家」	高知県立坂本龍馬記念館	令和4年11月1日(火)～ 令和5年1月25日(水)
	龍馬まつりin記念館	高知県立坂本龍馬記念館	令和4年11月13日(日)
	ウォーキングイベント史跡巡り 「龍馬最後の帰郷—その息吹・種崎」	高知県立坂本龍馬記念館	令和4年12月4日(日)
連続講演会 「武士の時代を考える—その制度・精神・象徴」 第4回「武士と帯刀」	高知県立坂本龍馬記念館	令和4年12月17日(土)	

会場	参加者数(人)	行事内容と成果等
高知県立埋蔵文化財センター ※講演会は高知城歴史博物館 ホール	758	展示観覧者の他、関連行事として10/16にギャラリートーク(11名)、11/27に講演会(50名)を開催し、多くの方の地域の歴史に対する興味と関心の高さをうかがうことができた。
高知県立埋蔵文化財センター	ガラス勾玉41 土器34	参加された方は、体験を通して昔の人々の知恵や技術に関心するとともに、自分の手で作ることの難しさや作り上げた満足感を感じていた。また挑戦してみたいという感想も得られた。
イオンモール高知1階・ 南コート	50	半透明の三角帽子に、カラーセロファンやマスキングテープでデコレーションをし、オリジナルのパーティ帽子を作りました。今回のワークショップを通して、ものづくりの楽しさを感じてもらえたイベントとなりました。
高知県立坂本龍馬記念館・ 新館ホール	44	連続講演会「武士の時代を考える—その制度・精神・象徴—」の第3回は「城下町萩と武士の暮らし」と題し、森下徹氏(山口大学教育学部教授)に萩藩の事例をもとに、江戸時代の武士の実態や生活についてお話しいただいた。「今までにない切り口で武士の姿を知れた」というご意見もあり、好評だった。
高知県立坂本龍馬記念館	16,035	慶応3年9月、龍馬は脱藩後、最初で最後の帰郷を果たした。その目的は、木戸孝允の手紙とライフル銃千挺を土佐藩に届け、武力を背景にいざとなったら倒幕に立ち上がる覚悟を土佐藩に迫るためだった。本展では、龍馬の最後の帰郷の目的を紹介するとともに、その際に休息のために立ち寄った中城家を紹介した。
高知県立坂本龍馬記念館	427	毎年坂本龍馬の誕生日11月15日に近い日曜日に、桂浜で「龍馬まつり」が行われる。それに合わせて、当館でも「龍馬まつりin記念館」を開催し、開催中の企画展での特別展示解説などを行った。
高知市内の史跡	29	ウォーキングと地域の歴史を楽しむイベント。今回は、開催中の企画展に関連し、龍馬が最後の里帰り時に立ち寄った高知市種崎を学芸員の説明を聞きながら、歩いて見学した。特に、龍馬が休息した中城家の離れは普段は見られないので、参加者からは好評をいただいた。
高知県立坂本龍馬記念館・ 新館ホール	38	連続講演会「武士の時代を考える—その制度・精神・象徴—」の第4回は「武士と帯刀」と題し、尾脇秀和氏(花園大学・佛光大学非常勤講師)に武士と刀の関係についてお話しいただいた。「帯刀の話は初めてだったので、興味深かった」というご意見など、好評だった。

◎協賛行事

※ 記載内容は原則として事業実施報告書の記載に則しています。
 ※ 開催日（部門別）の順に掲載しています。 ※ 参加者数は、芸術祭会期中内での集計となります。

部門名	行事名	主催団体	日程
演劇	串田和美独り芝居「或いは、テネシーワルツ」& TCアルプ「バッタの夕食会」	La forêt(ラ・フォレ)	令和4年11月5日(土)・6日(日)
舞踊・ダンス	音楽劇「おらんくのかみさま」	奥田川親水公園の会	ワークショップ:令和4年11月18日(金)・19日(土)・20日(日)・22日(火) 成果発表会:11月23日(水・祝)
	Modern Ballet Studio SPROUT 発表会	Modern Ballet Studio SPROUT	令和4年11月27日(日)
音楽	午後の音楽会 レクチャー・コンサート	高知音楽協会	令和4年9月25日(日)
	こうちミュージックワンダーランド2022 in 天然色劇場	Music Wonderland 実行委員会	令和4年10月9日(日)・10日(月・祝)
	ザ・ゴサード・シスターズ	(一財)民主音楽協会 四国センター(MIN-ON)	令和4年10月10日(月・祝)・11日(火)
	高知コンサート・グループ 第69回定期演奏会	高知コンサート・グループ	令和4年10月22日(土)
	高知フライデーウインドアンサンブル 第39回 定期演奏会	高知フライデーウインドアンサンブル	令和4年10月29日(土)
	第8回ヤマハジュニアピアノコンクール～高知西地区予選大会～	ジュニアピアノコンクール 実行委員会	令和4年10月30日(日)
	高知コーラス合衆団 特別公演2022「コロナを超えて」	高知コーラス合衆団	令和4年10月30日(日)
	下八川圭祐記念 第46回高知音楽コンクール	(公財)高知新聞 厚生文化事業団	令和4年11月3日(木・祝)
	Ukulele good meeting	Ukulele good meeting 実行委員会	令和4年11月12日(土)・13日(日)
	第30回高知県民謡まつり	高知県民謡協会	令和4年11月20日(日)

会場	参加者数(人)	行事内容と成果等
蛸蔵	124	両作品ともチケットは完売し、演劇を初めて鑑賞する方も多く、笑いに溢れ楽しんでいただけた。6日は出演者に新型コロナウイルス感染症陽性者が判明したため、公演中止となった。
奥田川周辺および伊野南小学校	72	公募で集まった1～6年生の小学生が、多様なアーティストとともに奥田川や地域について学びながら、本年度は「まちにいる自分たちのかみさまを探そう」というテーマのもと音楽劇の創作に取り組み、成果発表を行った。
高知県立美術館ホール	700	第1部 Happy X'mas 第2部 えんとつ町のプペル 1年間の成果をお客様に観ていただくことが出来ました。温かい拍手をたくさんいただきました。
高知県立美術館ホール	127	毎回島崎がレクチャーをしていますが、今回はピアノのレクチャーを「やすみつ」さんが行って、彼女も自信になったようです。女声合唱は少人数のため二重唱が主になりましたが有名な流浪の民は三重唱が嬉ばれました。
香南市天然色劇場	約600	今回5周年という事でプロのアーティストさんにも来ていただいたりグルメとのコラボも実現しました。集客は予想以上でした。高知新聞さんにも取材をしていただき高知県、香南市を少しでも盛り上げることができました。
四万十市立文化センター、高知県立県民文化ホール・オレンジホール	1,231	ザ・ゴサード・シスターズの洗練されたケルト音楽の演奏や透き通る歌声、またアイリッシュダンスに、温かな拍手が送られ、会場全体が一体となり心通うコンサートになりました。
高知県立県民文化ホール・グリーンホール	266	第1部は様々なクラシック音楽を、第2部は「THE JOY OF MUSICALS!」と題して、どこかで聴いたことがあるような有名なミュージカルナンバーを演奏。終演後のお客様の笑顔を見て、生で聴く音楽の素晴らしさを改めて感じました。
高知県立県民文化ホール・オレンジホール	645	吹奏楽3部構成のステージ。1部はクラシックステージ、2部は企画ステージで廃校になった長者野小学校を舞台にした「校舎とイチョウ」。吹奏楽・合唱・イラストのコラボステージ。曲は委嘱作で今回初演。3部はポピュラスステージとし演奏会を行いました。
四万十市立文化センター・大ホール	50	幡多地域在住でピアノを学習されている方々(ジュニア)に、ピアノ演奏の技術、表現力を競っていただきました。4名の方を、2次審査(Web)に、推薦させていただきました。
高知県立県民文化ホール・オレンジホール	403	コロナの為、3年ぶりの有料公演でしたが、思いのほか多くのお客様にきていただきました。特に一部の童謡のステージ、二部の高知市横浜の風景を歌った組曲など喜んでいただけたと思います。アンケートにも、「久しぶりのステージに感激した。」等の声が寄せられ、これからの活動に勇気づけられました。まだまだ、コロナ以前の観客数には届きませんが、皆さんに支えられ頑張っ参ります。
高知県立県民文化ホール・グリーンホール	250	コンクール申込人数は、一般17人、学生9人の計26人。下八川大賞・1位は今年も該当なし。2位2名、3位2名の計4名が受賞した。
ライラホール、ミニシアター蛸蔵	232	昨年に続き2度目の開催となった。少しずつ全国に認知して頂けるよう、実行委員が各所での活動やSNSを通してPRにつとめ、13日本番でのLIVE配信を多くの方に見て頂くことができた。
三里文化会館	100	民謡協会加入の6団体が参加し、三味線・尺八・太鼓に合わせて唄うオープニングに始まり、全国の民謡を中心にそれぞれの団体の特徴を活かした、三味線・尺八・太鼓の演奏やその伴奏で唄や踊りを披露しました。

部門名	行事名	主催団体	日程
音楽	都山流高知県支部 令和4年度 尺八定期演奏会	都山流高知県支部	令和4年11月20日(日)
	沖縄の風 ～ちむどんどんコンサート～	さくらの里 すくも音楽祭実行委員会	令和4年11月27日(日)
	エレクトーンステージ2022 発表会	ジョイフルライブ実行委員会	令和4年12月18日(日)
美術	赤か、青か	香美市立美術館	令和4年9月3日(土)～10月16日(日)
	第31回のいち動物公園写真コンテスト作品展	(公財)高知県 のいち動物公園協会	令和4年9月4日(日)～ 11月3日(木・祝)
	高橋雨香展	いの町紙の博物館	令和4年9月17日(土)～10月30日(日)
	片岡宣久 日本画展〈草木鳥魚〉	中土佐町立美術館	令和4年9月28日(水)～10月23日(日)
	－ 孤高の拓本家 － 井上拓歩展	いの町紙の博物館	令和4年10月1日(土)～10月30日(日)
	第63回室戸市美術展覧会	室戸市・室戸市教育委員会	【一般の部】令和4年10月21日(金)～ 10月29日(土) 【小・中学校の部】令和4年11月1日(火)～ 11月6日(日)
	写実絵画の実力 ーリアルとは何かー	香美市立美術館	令和4年10月29日(土)～12月18日(日)
	水辺の野外アート展	現代企業社	令和4年11月3日(木・祝)～ 11月25日(金)
	上村久美子 色鉛筆画作品展	いの町紙の博物館	令和4年11月6日(日)～11月20日(日)
	公募作品展 第24回OURギャラリー展	(公財)やなせたかし記念 アンパンマンミュージアム 振興財団	令和4年11月12日(土)～ 令和5年1月9日(月・祝)
夜の紙博～光る森と月兎～	いの町紙の博物館	令和4年11月19日(土)・20日(日)・ 23日(水・祝)	

会場	参加者数(人)	行事内容と成果等
高知市春野文化ホール・ ピアステージ	50	「三曲演奏」を県民の皆さんに広くご紹介することを目的に開催しました。演奏曲は尺八曲が3曲、糸方との合奏曲が9曲、合わせて12曲としました。
宿毛文教センター	280	宿毛市に縁のある演奏家をお招きしたという事もあり、大盛況の内に終わることができ、本当に嬉しく思っております。ご来場のお客様が心から楽しんでくださった事が伝わってきた、最高のコンサートだったと思います。
四万十市立文化センター・ 大ホール	400	アルコール消毒などの対策はしましたが、前年等に比べると落ち着いた感じの中の開催となり、祖父母、友人等の来場が増え、日頃の練習の成果を親しい方々に見ていただけました。
香美市立美術館	766	当館収蔵作品と2名の作家の作品展で構成した2つの色味空間を体験する当展は、来館者からこの企画を次回もやってほしいとの声も多くありました。皆さんが空間で色々と感じ、満足して頂いたと思います。
高知県立のいち動物公園・ どうぶつ科学館	9,090	写真コンテスト応募作品の中から、審査で選ばれた入選作品62点を展示しました。動物たちの一瞬の表情や動きを捉えた素晴らしい作品の数々をご覧いただき、多くの来園者の皆様に楽しんでいただけたと思います。
いの町紙の博物館	3,357	書家・高橋雨香氏の個展を開催した。和紙はもちろん、金属や石、布などに書いた文字作品を展示し、書道に詳しくない人や子どもにも楽しんでもらうことのできる内容であった。
中土佐町立美術館	299	須崎市桑田山のアトリエで制作を続けている日本画家、片岡宣久氏の展覧会を開催。入館者数がなかなか伸びず反省点も多々あるが、本展に合わせて新作を多数制作していただき、来館者の皆さまが大変喜んでくださった。
いの町紙の博物館	2,471	拓本家・井上拓歩氏の没後10年を記念した展示会。土佐和紙を使った拓本作品を展示することで、同氏の業績紹介や、和紙と拓本の文化普及に成果があった。
室戸勤労者体育センター	1,679	「一般の部」では洋画9点、日本画12点、書道(漢字)22点、書道(仮名・調和体)10点、写真29点、彫塑・工芸・デザイン17点、陶芸32点、漫画7点の出品があった。「小・中学校の部」では1,812点の出品があり、会期中は1,679人の来場があった。
香美市立美術館	1,127	当企画は、比較的皆さんが親しみを持つ内容であり来館者の方々からは好意的に受け止められた。当館で収蔵されている作家の作品を中土佐町立美術館からも借用し、並べて展示することで見応えのある展覧会となった。
高知県立美術館内 ミュージアムカフェマルクと 美術館の池	—	カフェ・マルクの前の池に大きな野外立体作品を7点、店内に平面画と立体作品を展示しました。期間中、美術館に来られた方は否応なく目に飛び込んでくる野外作品群を撮影などして楽しんでいました。高新にも掲載された為、多勢の方に見に来て頂きました。(人数等は不明です)
いの町紙の博物館	1,799	上村久美子氏の精巧な色鉛筆画作品を展示した。身近な画材である色鉛筆画を題材とすることで、子どもから大人まで関心を持って鑑賞していただくことができた。
香美市立 やなせたかし記念館・別館	1,347	「平和」をテーマに17文字詩と絵をかいた、はがきサイズの作品を公募し、寄せられた全640点を展示した。コロナ禍ならではの、思い思いの「旅」が描かれた作品が集まった展覧会となった。
いの町紙の博物館	1,156	和紙と光をコラボレーションさせた作品を夜間開館で開催した。作品展示のほか、ワークショップの開催、オリジナルグッズの販売、フォトコンテストの開催など、様々な形で「和紙と光」に親しんでもらうことができた。

部門名	行事名	主催団体	日程
美術	第33回中岡迂山記念全国書展	中岡迂山展実行委員会	令和4年11月26日(土)～12月4日(日)
	横山明子個展 フィレンツェに生まれた和紙画たち 2022 「和紙のルネサンス」	いの町紙の博物館	令和4年12月2日(金)～12月11日(日)
映像	日高村写真展 Fragments-日常のカケラ-	日高村役場	令和4年10月6日(木)～10月19日(水)
	第15回さかわ・酒蔵ロード劇場2022	第15回さかわ・酒蔵ロード劇場 実行委員会2022	令和4年11月19日(土)
映画	第198回市民映画会	(公財)高知市文化振興事業団	令和4年9月21日(水)・22日(木)
	シネマな夜VOL.269 「モロッコ、彼女たちの朝」	シネマ・サンライズ	令和4年10月26日(水)
文芸	しきなみ短歌の世界 初めての短歌教室	(一社)倫理研究所 家庭倫理の会・高知	令和4年11月3日(木・祝)
伝統文化	秋季いけばな県展	高知県華道協和会	令和4年10月21日(金)～10月24日(月)
	第21回名流吟剣詩舞道大会	高知県吟剣詩舞道総連盟	令和4年10月23日(日)
	伝統文化音楽 地唄・箏曲・尺八本曲演奏会 「地唄・箏曲で奏でる四季の情緒」より	琴古流尺八竹童社藤寿会 高知支部	令和4年11月3日(木・祝)
	淡路人形浄瑠璃 高知公演	(公財)高知市文化振興事業団	令和4年11月19日(土)
	正曲一絃琴白鷺会 秋の演奏会	正曲一絃琴白鷺会	令和4年11月26日(土)
総合文化	第18回四万十市文化祭	四万十市文化祭執行委員会	令和4年9月9日(金)～12月25日(日)
	香美市芸術祭	香美市芸術祭実行委員会	令和4年10月1日(土)～11月20日(日)

会場	参加者数(人)	行事内容と成果等
北川村民会館・大ホール	187	作品応募数は136点(一般の部94点、高等学校の部42点)、招待・無鑑査等を含めて169点を展示した。楷書、行書、草書、かな文字など多彩な作品類に来場者は見応えがある自らの作品制作の参考になるという声を多数出た。又、田野町の水墨画展と安田町の色紙展と会期を合わせ、3町村を周遊するスタンプラリーを実施した。
いの町紙の博物館	956	横山明子氏の4年ぶりの個展。土佐典具帖紙を使ったちぎり絵作品は、同氏の感性と、薄くて丈夫な土佐和紙の特性を十分に生かしており好評であった。また、会場には日本とイタリアの紙を通じた文化交流の様子も紹介されており、相互文化への理解の発展もあった。
日高酒蔵ホール	361	開催期間14日間での来場者数は361名、1日平均約26名だった。写真、イラスト、映像、音楽で日高村の日常を表現し展示した。また、スマホで撮影した日高村の日常写真を募集し46名から約450枚が寄せられた。
佐川町上町地区・さかわ酒蔵の道一帯	4,423	3年ぶりの有観客イベントとして開催。コロナ対策で飲食コーナーを会場外に変更したが、まずまずの盛況ぶり、大きな事故もなく無事に終了した。
高知県立美術館ホール	379	今は全国的にも珍しくなった2作品同時上映の映画会ですが、どちらの作品も大変好評で楽しんで鑑賞いただけたと思います。当日はあいにくの雨になりましたが、多くのお客様に足を運んでいただくことができました。
高知県立美術館ホール	207	モロッコという国の異国情緒、また泰西名画を思わせる美しい映像、孤独を抱え苦境に立った女性同士の助け合いというドラマ性もあって、シニアを中心に多くの皆様にご覧いただくことが出来ました。
高知市立自由民権記念館・研修室	22	お二人の地元のしきなみ短歌講師によって行う。倫理未会員、しきなみ未会員12名の方々が、とても熱心で、実習で初めて作られた短歌が素晴らしく、会場で感動でいっぱいになった。「和やかで良かった」との感想は頂いたが、入会には至らなかった。
高知大丸・本館5F特設会場	2,161	左記の要領にて予定どおり実施いたしました。会期中さしたる事故もなく、2,161人の方々のご来場を得て、無事終了することができました。
高知県立美術館ホール	300	高知県の文化向上を視野に吟剣詩舞道の普及推進が図れました。今後はさらに来場者の増加を目指し、後継者の育成を目指します。
高知県立歴史民俗資料館	25	会場やコロナ感染上スタッフを含め40名を上限として座席を35席準備し開場したが若干の空き席がある程度入場があり概ね所期の目標を達成した。一日4桁台の感染を記録し中止が頭をよぎったが開催出来一安心した。
高知市立自由民権記念館・民権ホール	100	人形浄瑠璃を高知で観る機会が希少なこともあり、多くの方が興味を持ってくださりチケットも完売しました。演目だけではなく、義太夫、三味線、人形遣いについてレクチャーを受ける時間を設け、知識をより深める良い機会になりました。
高知県立美術館ホール	150	薄明かりの中での朗読劇では静寂で厳かなひと時を過ごせたとお言葉を頂戴し、一絃琴に関心を持ってもらう為にアニメ曲の演奏や一遙会の演奏ではサマカイトの音色を菊亟先生には「きさらぎ」の唄を披露して頂きました。
四万十市立文化センター、 田野川小学校体育館ほか	4,166	合計25団体の参加があり、学生を中心としたダンスチームの初めての参加もあり、昨年度より参加者も増え、事故などもなく無事に終了した。田野川小学校体育館では、3年目となる6団体による合同展示を行い、3日間で延べ336名の参加があった。
プラザ八王子 (香美市立美術館ほか)、 香美市立中央公民館、 香美市役所	1,283	香美市芸術祭は香美市文化協会員をはじめとし、市内の児童生徒、一般参加者が、日頃の文化活動の成果を発表する場であると共に、各会場にご来場いただいた多くの皆様の文化芸術を通じた交流を深める場として盛大に開催されました。

部門名	行事名	主催団体	日程
総合文化	第51回高知県教育文化祭	高知県教育文化祭運営協議会	令和4年10月5日(水)～12月3日(土)
	第27回宿毛市オールドパワー文化展と女のまつり	宿毛市教育委員会・ 宿毛市老人クラブ連合会・ 宿毛市文化協会	令和4年10月21日(金)～10月23日(日)
	放送大学高知学習センター 芸術文化祭2022	放送大学高知学習センター	令和4年10月29日(土)・30日(日)

会場	参加者数(人)	行事内容と成果等
高知県立県民文化ホール、 オーテピア、須崎市立市民文化会館、 四万十市立文化センター、 香南市夜須公民館ほか	3,638	期間中、3年ぶりにすべての行事を開催しました。中でも音楽会や音楽コンクール・各種作品展などについては、関係者だけでなく、多くの方々にも来場してもらって、応援をいただくことができました。
宿毛市立宿毛文教センター	416	実施主体の宿毛市老人クラブ連合会の積極的な活動により、作品数は昨年の約2倍になり、見ごたえのある展覧会になりました。「女のまつり(芸能発表会)」もコロナ対策に配慮しながら、大いに盛り上がりました。
放送大学高知学習センター	86	在学生や先生方などの作品の美術展覧会、呼吸法のワークショップ、サークル・同好会による催しを開催しました。3年ぶりの対面開催でしたが、多くの方にご来場いただき、大変好評のうちに開催することができました。

高知県芸術祭執行委員会 委員名簿

(任期:令和2年4月1日~令和5年3月31日)(五十音順・敬称略)

役 職	氏 名	所属職名等
委 員 長	新納 朋代	(株)テレビ高知総合編成部放送実施部長
副委員長	鎌倉 昭浩	(公財)高知県文化財団理事長
委 員	上本 竹永	高知県文化協会事務局長
委 員	奥野 克仁	高知県立美術館副館長(学芸担当)
委 員	北村 真実	NPO法人こうち音の文化振興会理事長
委 員	坂本 龍馬	(公財)高知県観光コンベンション協会 プロモーション部プロモーション部長
委 員	高橋 英生	高知新聞社営業局広告管理部 デスク
委 員	津田 加須子	高知県立文学館学芸課長
委 員	溝渕 博彦	NPO高知文化財研究所代表
委 員	吉岡 一洋	高知大学人文社会科学系教育学部門 教授